藝州

嚴島圖會

巻之四

嚴島圖會卷之四

目録

弥山 神鴉
火消不動
白糸瀧
岩屋藥師
水晶石
滿干岩
地御前遥拜所
巳所明神遥拜所
頂上石
岩屋不動
石地藏堂
祈不動
御幸石
灌頂石
大日堂
目洗藥師
經塔
瀧宮 末社
幕石
力石
覚鍛堂
札乞阿弥陀
湯殿山神社
六地藏
白山権現
鐘撞堂
十一面観音
毘沙門堂
大師堂
愛染堂
中堂
二王門
舩岩
痳癬岩
龍燈杉
聖天堂
文珠堂

大威德明王堂　虛空藏堂　伊勢遥拜所
行者菜師　熊野権現　荒神社　玉取岩
永聞持堂　錫杖梅　時雨梅　瓶挙柏　閼伽井　弥勒堂
曼陀羅石　三鬼堂　奥院
日輪観音　水手向地藏　十王堂　善女龍王
荒神　龍馬坊　三剣窟　繪馬岩
龍窟　朝日観音　夕日観音

○
地御前　速田大明神　大頭大明神　天王社
大瀧大明神　宦幣社　惣社　角振社
府中上々田所氏　抓島

石川丈山書

神之駐蹕

馬彌山佳景
大真山真水得
以名揮者豈止
巍然高蔑而已

哉吟其靈以其
秀雅以形容拙
擬者是也至於
巖嶋之彌山而

以筆端描寫字
試且陳之風枯
而草木長雨洋
而義音生雲帶

山腰水湧泉穴
空谷傳聲羽葉
綢繆郁指之日
瀛洲五異域也

西指之日蓬萊
水畢景也桓〻
嶇徑華岳之廻
峯凜〻梧杉木

龍〻並聳晨色
煙霧齊飛晚粧
虹霓吐市中亭
佳氣感嘆嘆者逝

之居諸庭硎容
噓嘯嗷穹窿之
蒼苔小社重層
神目如電大字

屏峦鐘鳴獻享
白絲有似白陽
池櫻壇郤認杏
壇榕仝徑遺踪

空海顯示飛翔、
瀑布礒、響石
且爾二王木客
以默傳玄教天

士孫陀立法施
慈悲求利持以
達天機被護之麼
而通神禱猿啼

廉戲人哉忘形
噫有是日雲尊
之辭讓言
市杵姬之賢儀

而坐山更增其
靈秀也隆哉壯
哉四顧一望眼
窮數國若經界

聊視淘海之潭
洋古謂登泰山
而小天下今登
殆山而始知藝

邦文矣乎即崑
崙天台齊雲六
面東拱矣予視
之不能禁筆

聊書一篇以勅
遠徒者一哂云
爾

乙酉春三日
亜聖郭國公六十一代孫
士式撰

士式ハ孟子の裔ヨリて漢土杭州武林郡の人ニ明末我日本ヨ歸化て武林治庵と称も
四世の孫武林唯七赤穂の義盟ヨ列ル事人の能知る処ニ今も其子孫當藩ヨ存も

弥山開基の由来

弘法大師を
よそをる
契沖
佐伯やま
うゝひまの子紙
かゝしきゝ
かるも紙ちゝと
見てやいとゝ
文陽

嚴島圖會卷之四

弥山

大宮の後より登りて靈秀なる山をいふ登路十八町

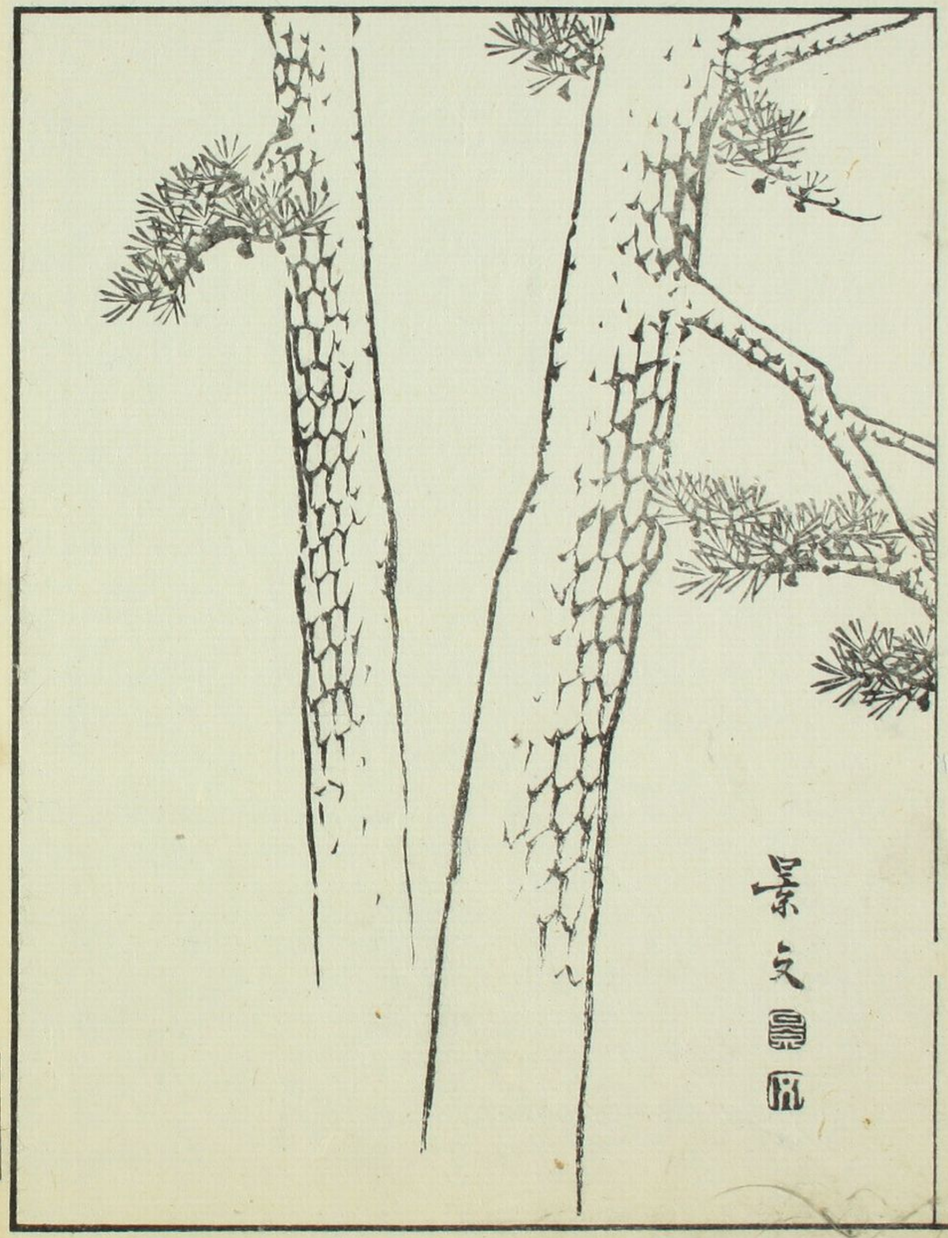
夫當山は高野弘法大師の開基なり大師姓は佐伯名は空海弘法は其の謚なり讃州多度郡の人母公曾て梵僧懐に入るとなん夜て孕みて身むことなり十有二月にして生る長じて儒を学び仏乗に帰依せり凡皇國佛法の興隆この大師乃力なりしなどいふべし

延暦二十三年異域より帰朝して偏く靈地を求め給たまへるこの地祥靄漠々として立昇るこを靈場なりとて梵閣を造立し山の形式宛たるを須弥に表して弥山と號し奉まへり一説にみせんは沸山の義にてもと明神の社まします山なりを略して称せり然るを佛場を開きて後弥のまよりとも云り

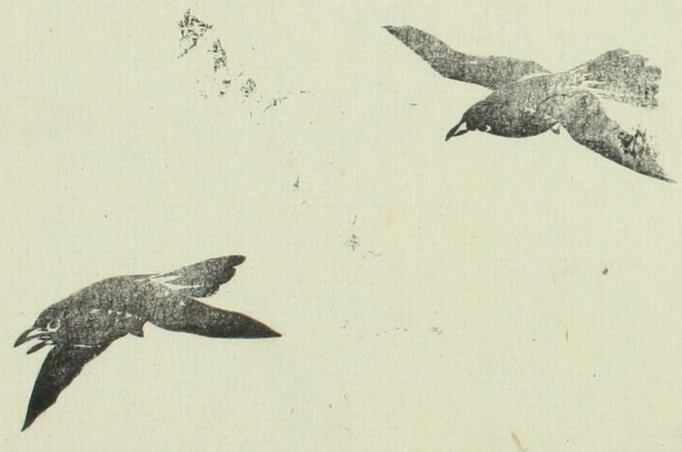
かゝる程は當山の大師の靈蹤たるはいなんも更なりその形像や前は神殿参差として青龍の蟠蜿せるが如く波は巨海浪高くして皎月点如の影を宿すの白雲頂上は鬘鬟松杉鬱茂して山勢異相なり本ちこの佛観堂塔處を得て不退轉の地を占免護摩脩法の烟たゆることなく鈴鐸のこゑ銷々として四海の昇平を祈る於とそ此山は鞋韈を入る者晨鐘は蹐り手許は下るを例と次聊もこれを侵すとなしの果して怪異なり殊は鰐鐵の案は立は譴罰を蒙るとなりげは靈神の巖窟本客の巣穴とこの嶺のぞ於をふなるし

按は大師この山は心をふ元たまること巻一清盛公靈蹤の件は佛あるとても知へし

○弥山つねは靈異多し或は時として火の燃るこなり其火炬火よりも赤くて掛るを緋絅次るが如し松枝葉をもかちて鮮なるゆゑを山靈のなほ不尋常燃火の類ひなりしぞ俗は弥山松明とらひて怨懼尊敬せもまて火危木の音の如き膏を去次となりこれは山上のこなる次大宮の辺はてもなり島人は駭て怪とせ次或は島人は



弥山神鴉（みせんのしんあ）



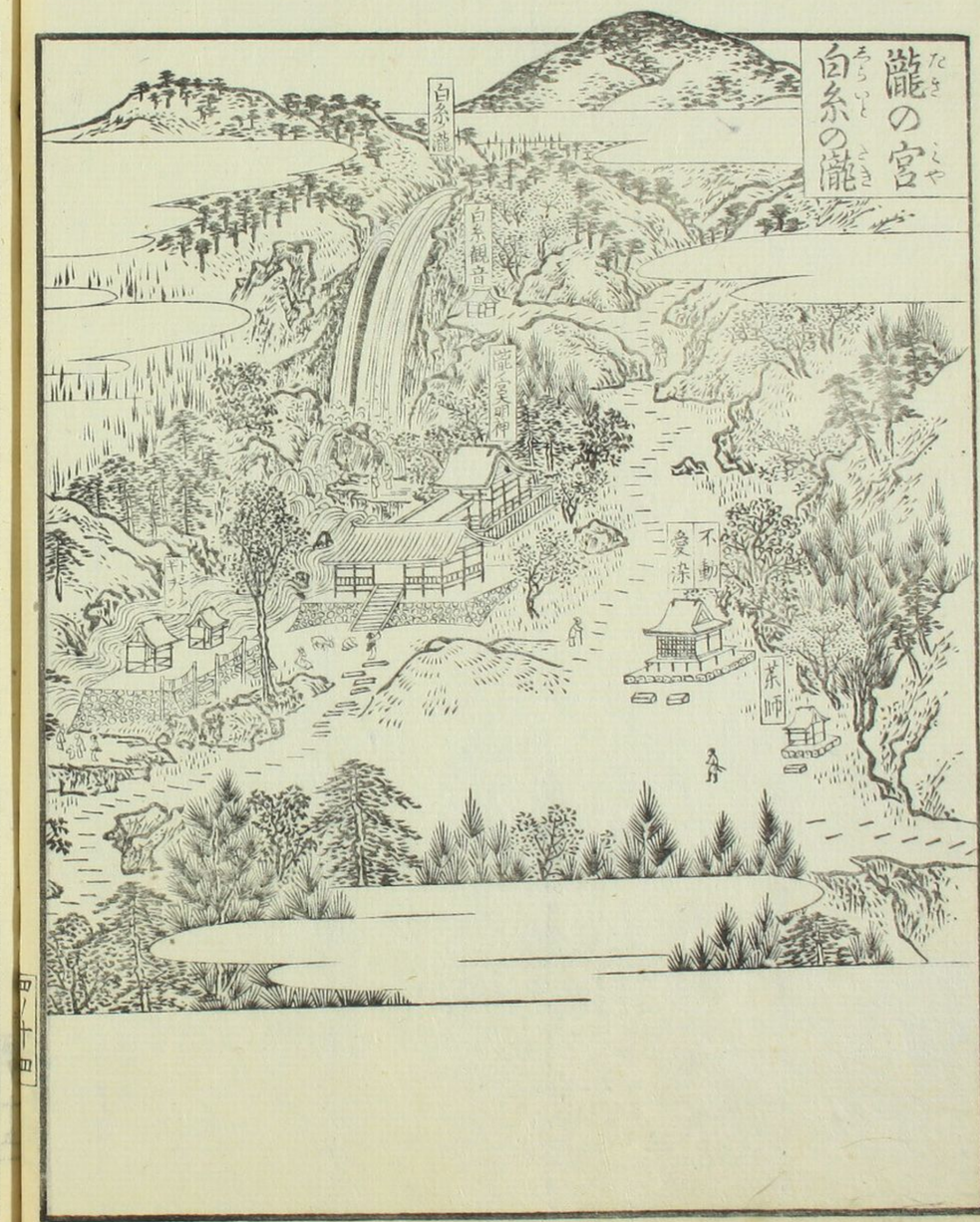
ても糸清の人よりも我慢なる者あれい弥山まさい本社の金玉大な
る男の長け一二丈もありさんと打ち見る山伏よ行者ふ玉行りその時
いいなりの剛強の者とも身心迷乱も然れども其身ひとりは
打ぎえて曽て他の目ハ觸ることなく雪の朝よ大宮廻廊の
屋根舞臺のうへとも一丈ばかりも踏み跨たりと打ぎゆるぎ狂い
と大なる足痕ばかりこれを俗よ雪のばくいふまと山上あるい浦を
よく黄昏のころ多くの人声聴ることあり これを俗ようさ丸といふケビ
の約キなれば侍叫びの義なるべしまと市立の時遠近より群集れ
るぶ中よ汚穢不浄の人島林を侵し宿るとも丸い其家鳴りはじめ
き梁柱ハ戸ハ至るまで顛倒するが如し一時ばかりよ止で本のを
し然ばかりのことをも左右隣家よい更まらぶこれを俗よ天狗顛倒
とふ上件ようくのとくなる山霊のしかるしむる所よりて最も人乃

懼ることハなり

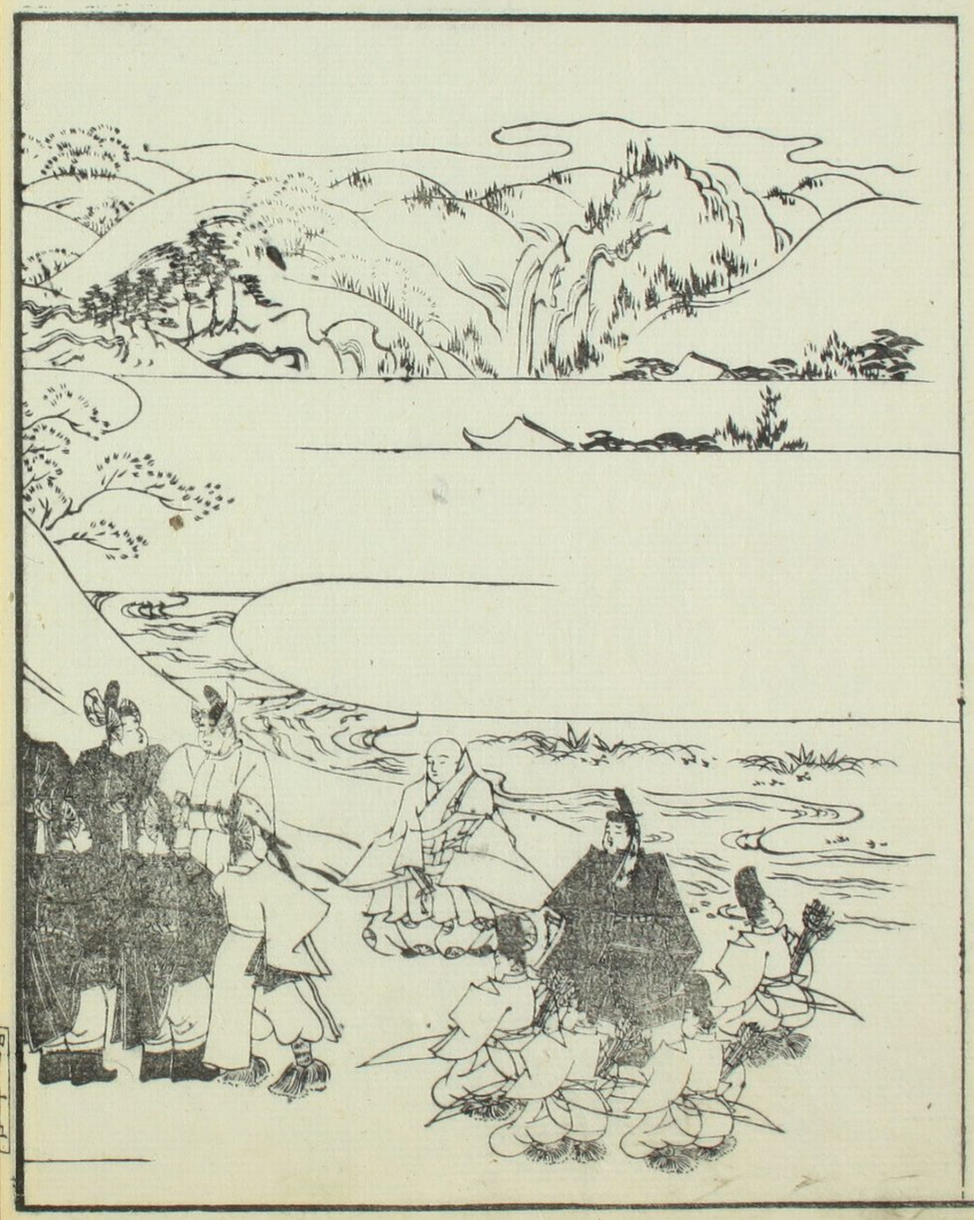
登弥山率記所見古詩三十韻

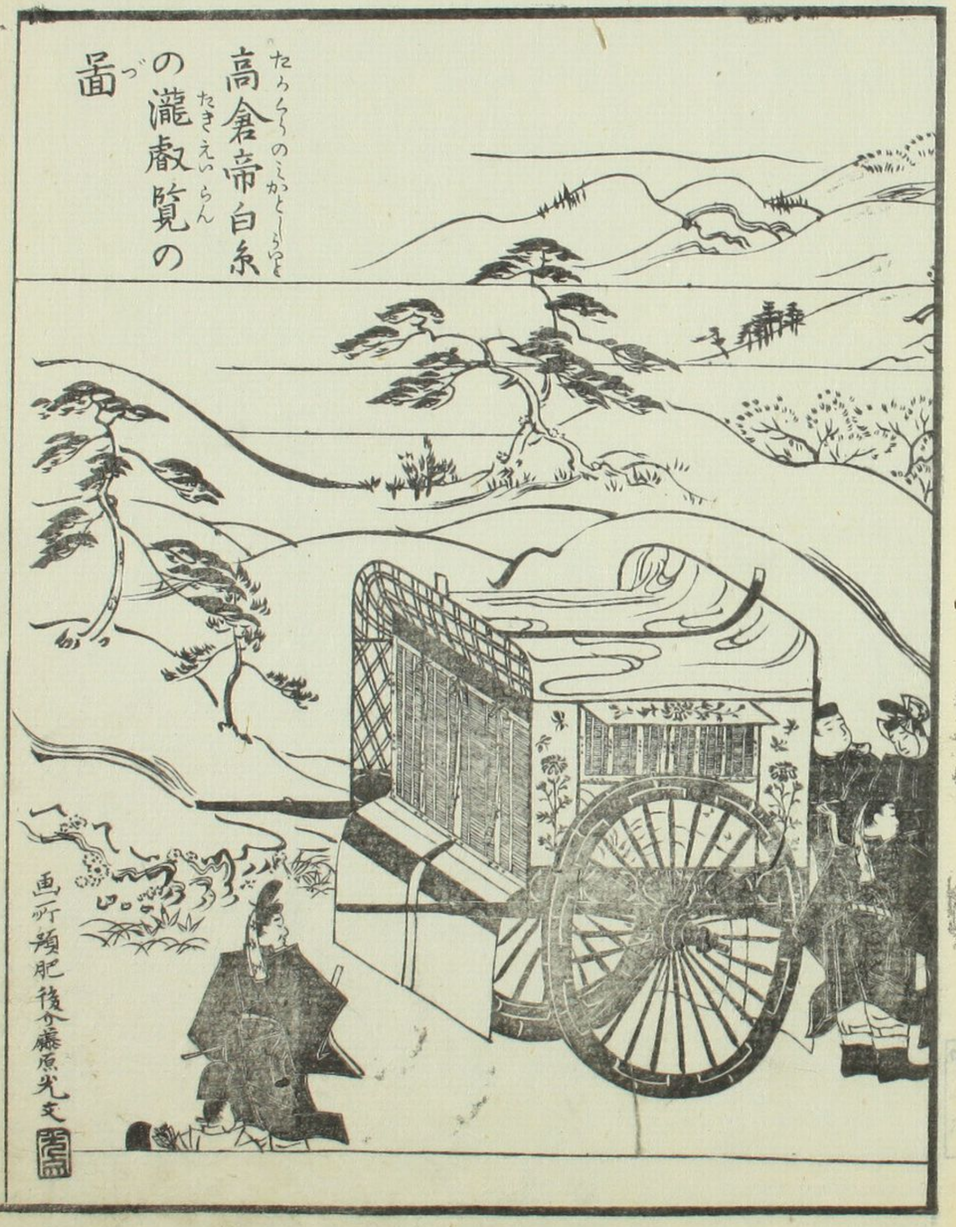
石川丈山

嚴島蒼溟上。弥山素雲邊。廟貌壓垠堮。霞關溢
穹天。伊昔蓬瀛地。縹渺接神仙。應真飛錫翁。安
期賣藥還。谿谷坤軸斷。崆峒日輪旋。渙汗懋樹
蔭。祖楊盥飛泉。旁礴無人境。登臨意惘然。芝草
酹玄解。松子飽侵佺。巨石競怪狀。遠客愕屯邅。
浮景接崑閬。層陰延虞淵。回顧踞疊磴。跼歩凌
絶巓。俛仰忘身世。騁懐獨蹁躚。魍魎時出没。蝙
蝠晝飄翩。帰墟千仞谷。弱水萬里船。對西青嶝
聳亘東翠微連。白鳥有雌雄。振古不知年。羽飛
巣壽域。幾度見桑田。日霎尊如在。市杵姫所躍。


龍の宮
白糸の滝
白糸の滝
白糸観音
不動愛染
茶師

家集
山高く
落る
瀧の
白糸の
空ゆ
みだれ
玉かと
散
見る
爰原清正
火消不動
大師堂
経塚



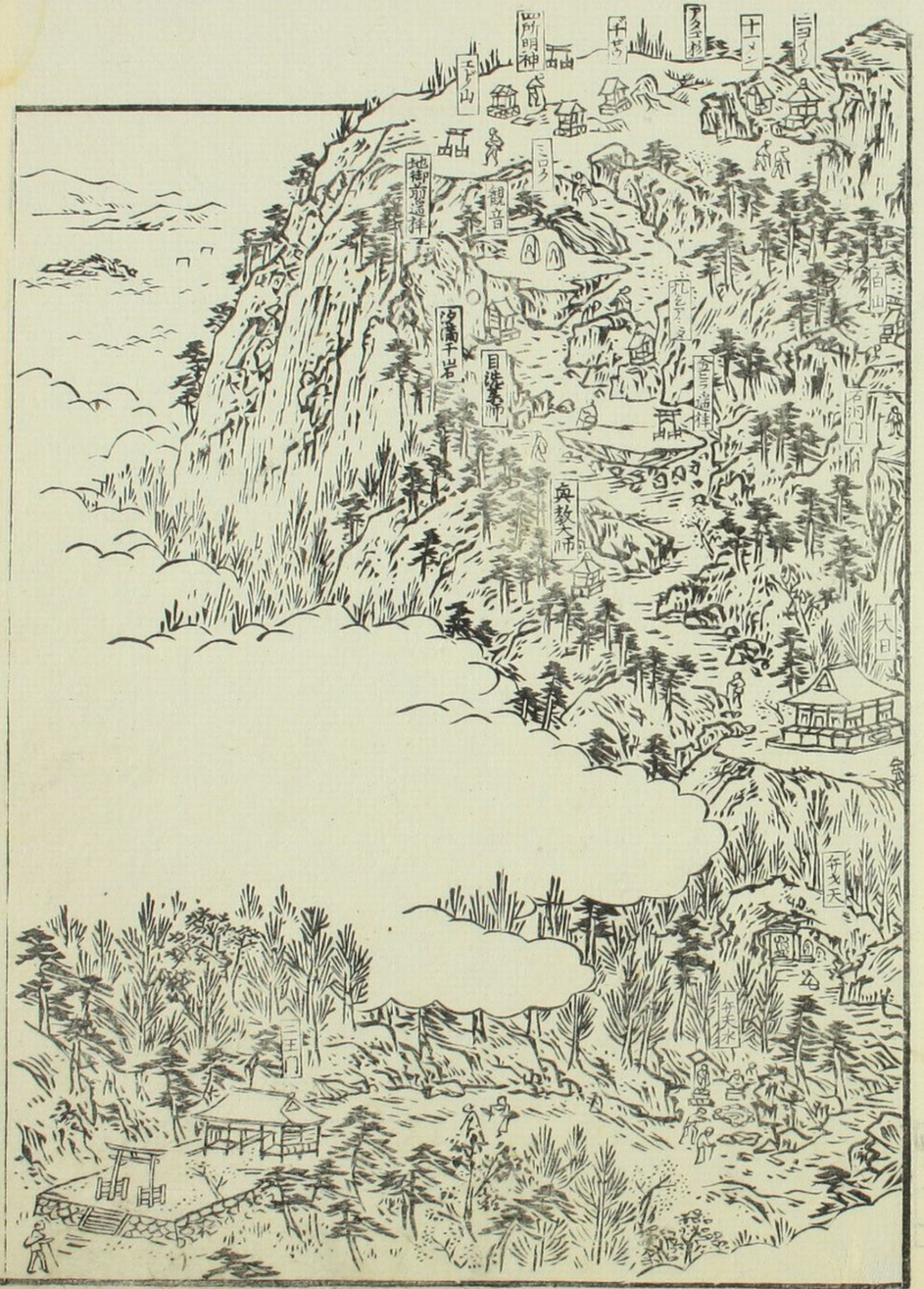

高倉帝白糸の瀧叡覧の略
画所預肥後介藤原光文

二聖三千載。小祠八九椽。空海据神區。遺求聞
持傳。蒲宰乳栒簾。華表峙術阡。猿叫煙霧裡。鹿
卧殿堂前。木客姑獲鳥。化鬼又変鳶。屋僧唱被
害。群民懼為厄。嗟非有道骨。疇能久誓旃。多病訪
負局。修生問稚川。高蹤嘯巖曲。薄言避塵緣。早
洗許由耳。將拍洪涯肩。茲游重難繼。卑懐聊欲
宣。讀者可姍咲。信筆記一篇。

とゝなみ草云ひつゝ弥山よのはゝんとく瀧の宮へたちよゝ
ゝ糸乃たき城なゞ糸こたゝ彼方へゆき久ゞ霊佛霊
社を拝次ゝふいくとゝ後とゝふゞをゝゝゞ危樓歩かくそ
びえゝ雲をたび飛岩前をれそ海よのぞゝゝ蘿をよぢ
てい巖窟よりゝ松ゝ根をとゝて澗底よゝぐゝ石泉ゝたゞり

れちゝ青苔ゝたゝ先ゝゝたゝゝ猿い子をよんで水の實拾あ
さゝ鹿い人みなれゝ寺つゝみ山ゝゝゝて絶頂よ坐せゝ
怠ちゝゝ絶登仙ちゝゝゞゝゝ蒲田のくゝゝゝゝ眼
下ゝゝゝゝゝ蜜の小舟も松のこゝゝゝよゝゝゝて幸
堂虚空藏よゝゝゝ佛舎利三光石などゝゝゝゝゝゝ
求ゝ少ゝの行者よ齋を供ゝゝ供物を頂戴ゝゝく
の院弘法大師の前よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
にこの山い寺護神ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
て酒を禁ゝ二王ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ人ゝゝゝい神罰ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝみゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

二王門



弥山全図

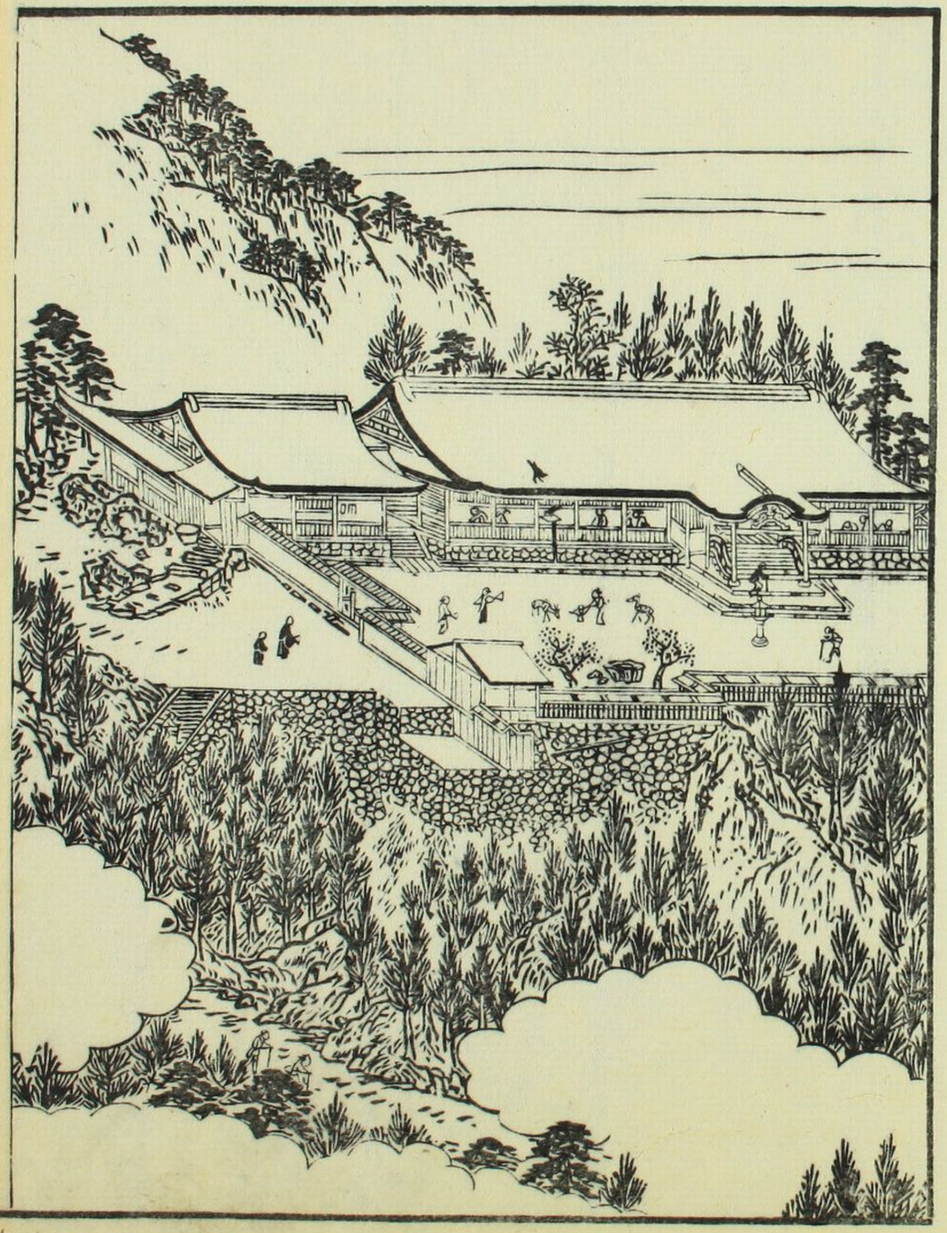
この山は雌雄一刃ありて年〻つまを育し相代生う山内の凡稚もとより
幾百千雄とふ数を〻しる次とい(ども神形のひあらちくもたちよ
ること絶ハ次その霊異ハ巻二養父崎社の條巻四速田社の條よくハしく本たまハ係せ
見て知べし

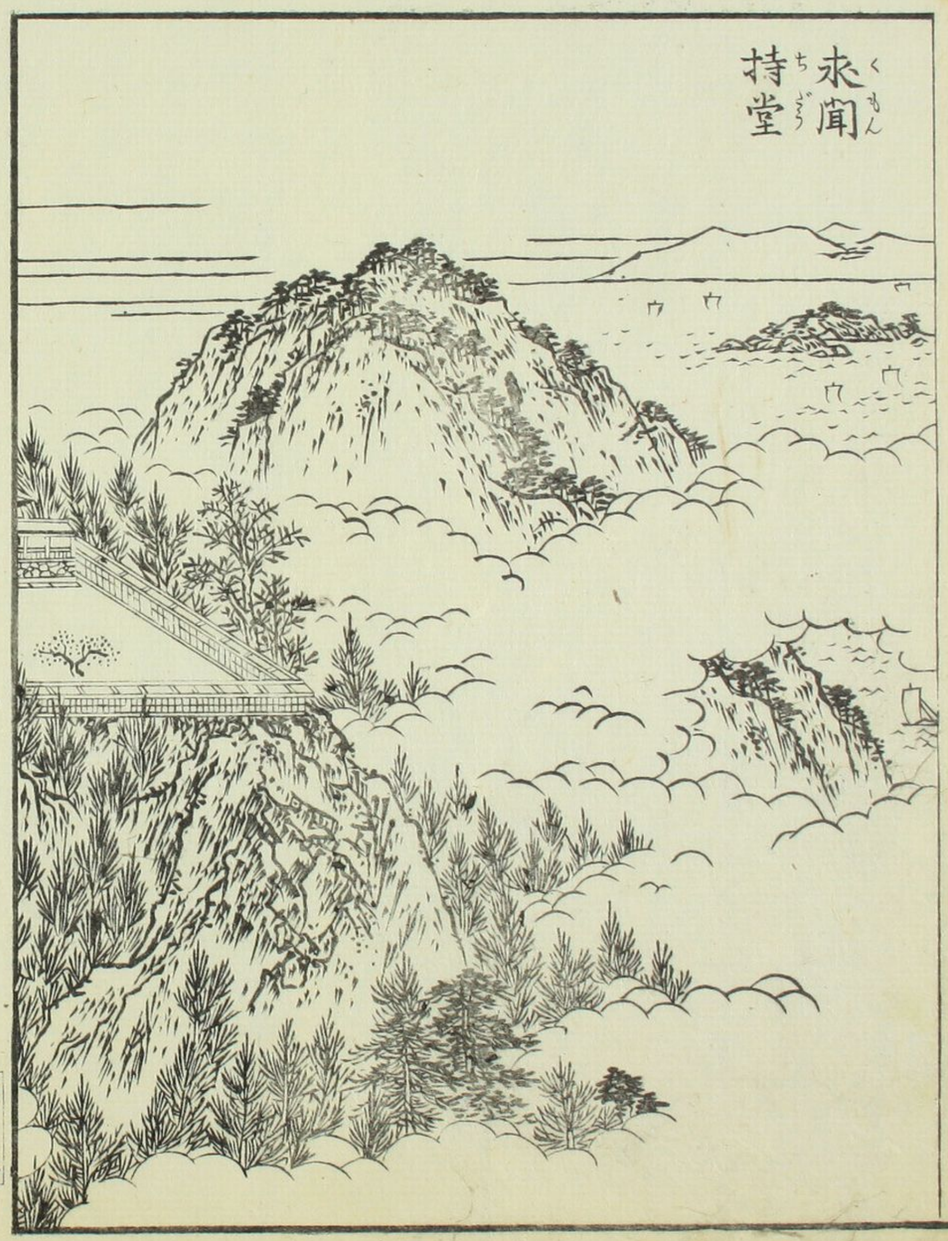
弥山神鴉八景の一

こけ屋まの宮屋をちこでいくこせう次々烏のつゞひをな仏脇　中納言糧光
為免らる小舟は神やんひしく〻やまかゝ茅の波よ折りる　宣阿
山形如湧趣尤奇林抄深邊雄與雌。豈有群
鴉爭茂樹。一雙萬古護霊祠。
山霊高占碧崔嵬。千歳祐民最異哉設供舟　僧燭麟
中吹玉笛。一雙玄羽出雲來。
峥嶸霊嶽瑞煙霏。遥見黒衣下翠微。蘋藻巧　黄檗僧日峯

啣斜日外。翩々時掠客船帰。
妙高鬱聳海中天。神鴉双棲知幾年。華鶴有
時鳴賽鼓。排雲啣供去翩々。　僧瞻雲
一拳螺髻渺茫中。老樹周遭天女宮。又有神
鴉能報吉。舟行長ト去來風。　伊藤東涯

石地蔵堂弥山登路の巻よりの
経塔上ス同じ法華一字一石を納む
大師堂上ス同明和三年東町の宇佐川重基建立
火消不動堂儀の宮の多ゝ[illegible]火伏の本尊とも[illegible]所由詳なる次
祈不動堂同所[illegible]大多堂なりしよ
傳いふ豊臣大閤征韓の浮その護身佛を藏免たまひしを古棟札
ホ毛利家人佐世與三左遠元赤造ゝとゝのうて裏書は文録元年三月中旬




來聞持堂

平宗盛寄附鐘銘

伊都岐嶋旅山
水精寺
奉施入

治承元年十一月日

施主　右大將平宗盛
　　遠江聖人永意

本将軍開白太政大臣太閤秀吉公高麗御弓矢被思召立同二年高麗
悉従八月御帰朝為未御沙汰記置者也とゝのり太閤の護身佛なるよ
しゝゝるいこまゝふ據なるべし

瀧宮　弥山の半腹ゝのり一ノ隅岡宮ともいふ　祭神湍津姫命　一説には三女神を祭るといへと詳らかなる里老の
はゝ前なゝはゝ毋神なりなど　碑にはこの宮へ嚴島大明神の女なりとて地乃
いゝなとと據もなき妄説なり

愛染堂　瀧の宮のかと

白糸瀧　たきの宮社　山上よりのり

未社　祇園牛頭天皇　歳徳神

張り打つる瀑布のはやまことに白糸の乱せるゝ如し　去當境の奇観風
人騒客の徒ゝにさることを紙ハきる而なり　夏月蛍火多くゝて打ちゝる
水の縦横よりまゝ　恰も小文の織縫に似ゝり
高倉天皇御幸記にいたく日もられすゝゝへ滝のゝゝへま
みゝとたまふ公顕俊ゝとよみてかきつゝる

千ゝ井よりおちゝる滝のゝゝ糸ゝをなびかせるゝ

ゝゝ糸のたまゝよゝ

やゝたゝゝ登れのほゝる去月のゝゝ見るゝゝ糸の滝　曼珠院法親王

瀧宮水蛍　八景の一

この〳〵やれ光ゝくゝやゝひゝくゝのゝるゝも滝のたまとみゝる　右中辯光宗

滝のゝゝおいめゝもゝゝ免波玉垣のたまとみゝなゝ蛍とひゝふ　権大僧都恵通

たゝゝ浪よるゝ蛍のひゝまゝで流ゝゝ去まゝるゝゝのゝゝ在　宣阿

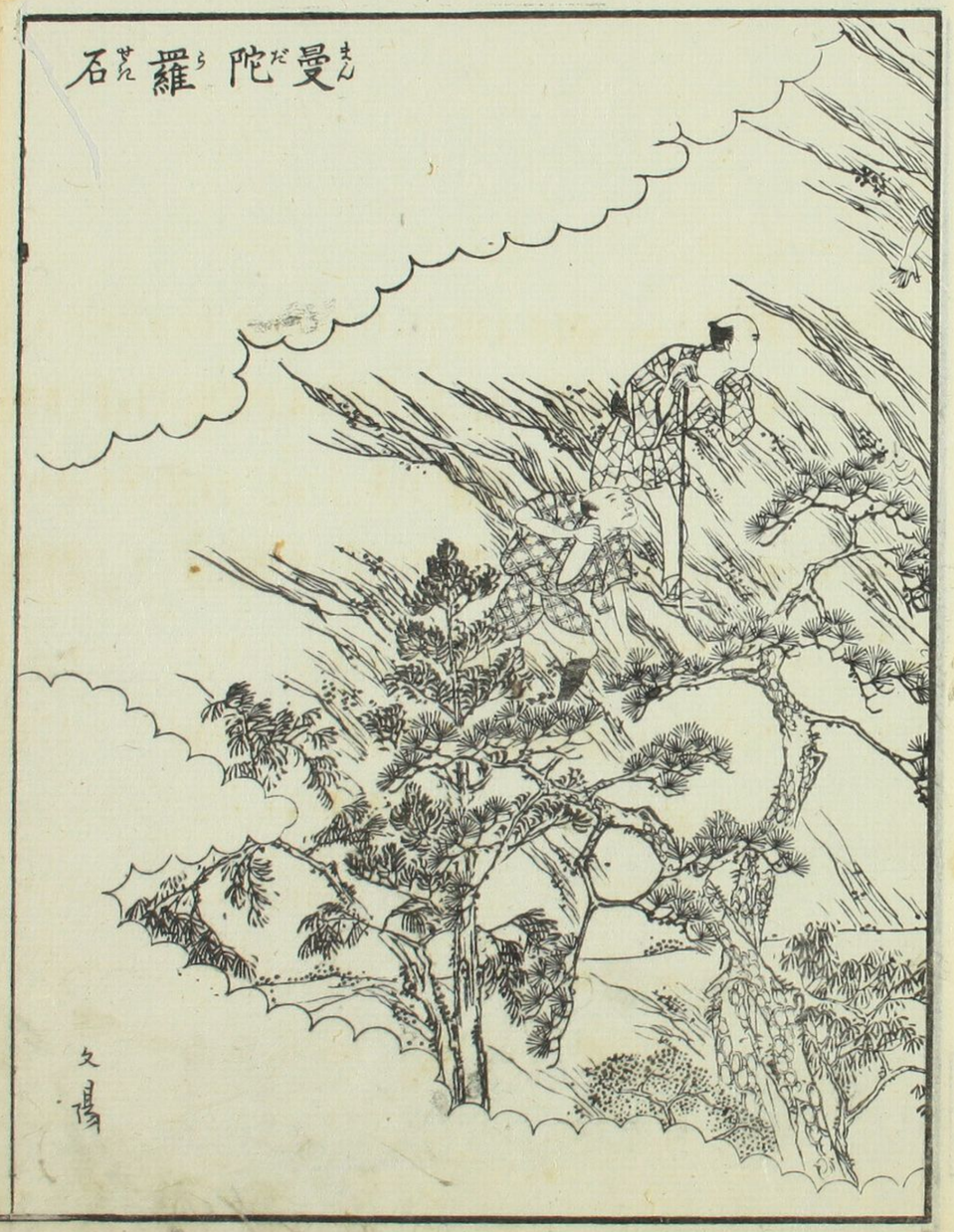
ゝゝまたれゝゝみやまゝゝ葉ゝゝ降ゝる　難波野坡

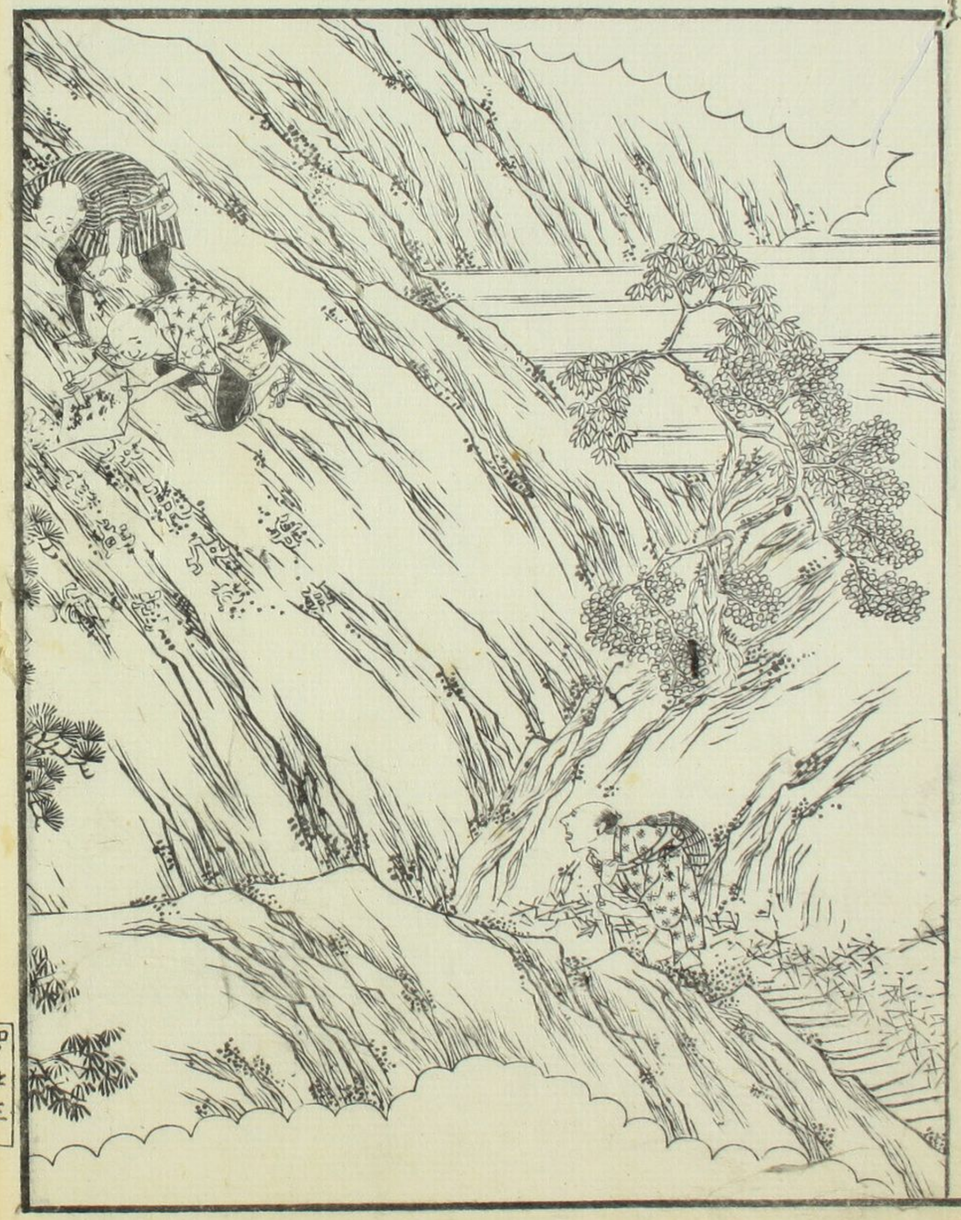
たき浪よゝゝがゝゝつゝるゝゝゝゝ那ゝ　廣島風律

森々緑樹遠宮邊南岳懸雲吐立泉萬壑水　藤原綱長

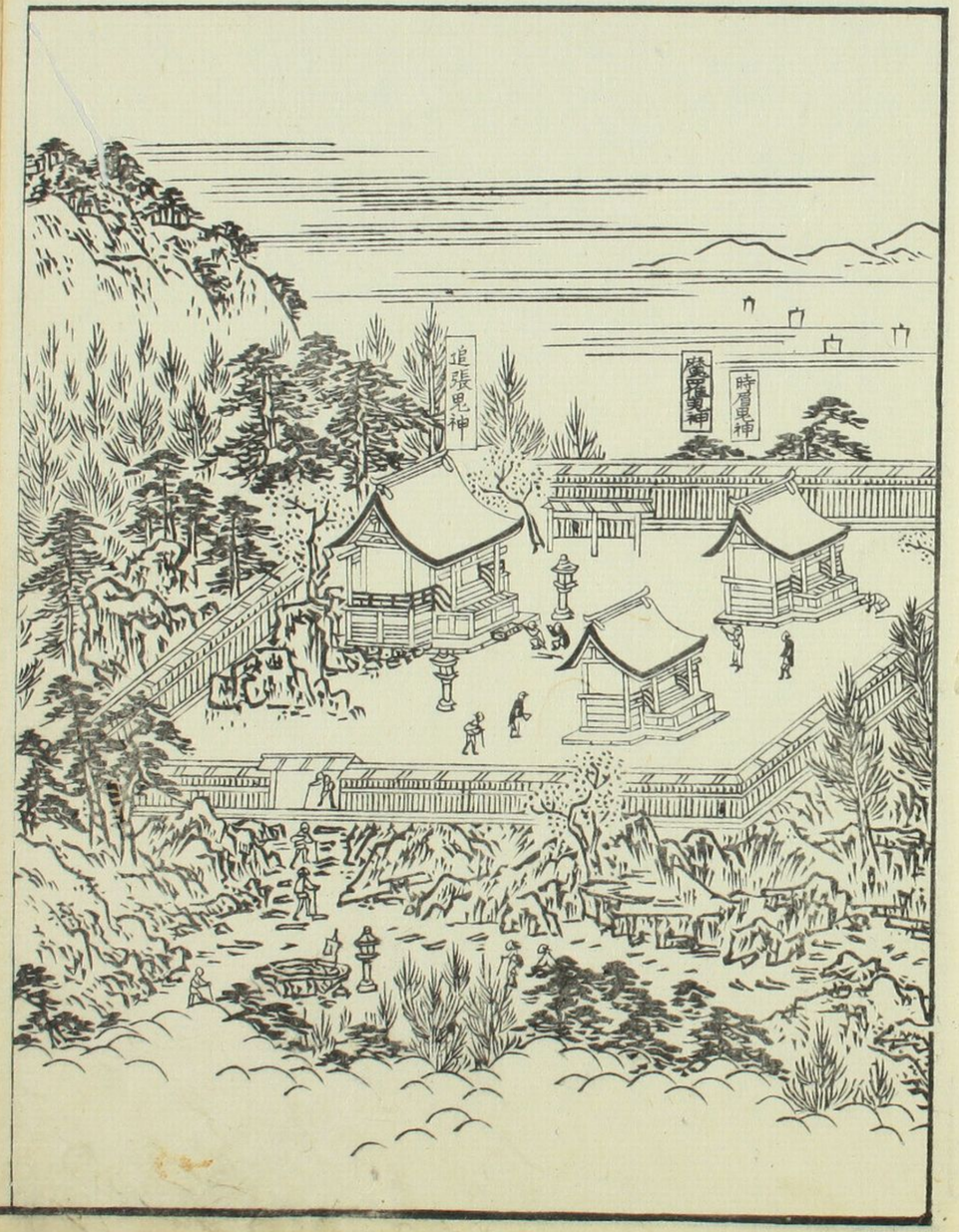
螢三伏夕。涼風乱影似秋天。

霊祠夜静氣如秋。燿々群飛燎中流。因憶古　黄檗僧郎中


曼陀羅石
久長



三鬼堂
弥山賞月
春水
非隨仙侶來
安覩仙山月
直自海心升
又於波面没


追張鬼神
時眉鬼神

人本數斛光、編、岩谷、樂優遊。
澗陰、古廟倚、慈籠、自是幽人避暑、宮、晩、映、水
篠、螢火、影。輕、和、殘沫、逐、微風、
僧擱麟

陟幸石 瀧の前の平らなる岩なり 高倉帝御幸の時

この岩の上より洗興を磨させたまひしとぞ

幕岩 弥山登路十一町より山の半腰なるそびえたる岩

壁をその形幕を張るがごとし

中堂 登路乃休

岩屋藥師 同所の上なる巖の内に安置せる故よりの名なり

前なる流に板橋をかけり

灌頂石 同十四丁

力石 名義詳らかなる事里談よりいまく前の國守福島左馬左夫正則登山の紀行に慮よりいまくて怪異なり

二王門 金剛力士二軀をたてり これより上 弥山の本山なりて 登路十五町目なり 故に未の時より引返さ

いる所なる所端なり

このうを限りとして常の人登ることなし 然れども一人なる夜禁なりなり

水晶石 二王門と大日堂の間にあり丈余の大石ふしを中央ふ

大日堂 梵字より十八町 弥山の本堂にして所謂神護寺これなり 本尊大日如来

正月七日この堂に於て 僧正今なり

傳云大同元年に本堂建立なりと 按ずに 弘法大師の帰朝まもなきこの年

よりこれ海路のついでにたちより給ひて 冥きたまひしんと 灼然なり

草創記によりて往年のころ空海上人この山に渡海してその霊験戒神

言語を断なるを見て 弥山を建立し 瑜伽の法水を汲て 三密乃月

をしまし 真言秘密の乃場とせり 下界の拝は大師の作山形の持とふもの

覚鑁堂 又奥教堂

覚鑁上人は平将門の裔孫にして肥前の人なり 康治二年に入寂し

たまひし 高野大師の流を汲で 根来乃法水をたゝへたまひし比類

なきなき 真言の学匠にてぞおはしける 曾て大師の旧跡を慕ひこの山にと計入て 永聞持を脩せ

ひとしきりとぞ

船岩 同所の拾遺の方の巖にして上は借本を生せり形の似るをもて号けり 岩下に石像の地蔵なり

滿干岩 同所はかう岩の半み腕を容るゝ程の小孔ゝ潮水あり年中旱年ゝもかゝるとも涸ることなく高頂にかゝる塩泉のかよへるゝと一奇

とらべし

同洗藥師 同所の傍ゝかう眼を憂ふる者この滿干岩の潮水を以て洗ひ本尊に祈ると紀の験ありとゝ用て叶名かう

札乞阿弥陀 同所ゝ

疥癬岩 同所ゝかう觸ることゝ紀忌む疑ゝ疥癬を生ずとゝ

地御前遥拜所 同所ゝかう下ゝ海中ゝこの所ゝ鳥帽子岩とゝ名石あり形似るをもて号く

湯殿山神社

四所明神遥拜所 此所ハ依ゝかう丹生高野の比叡山をさしていゝ

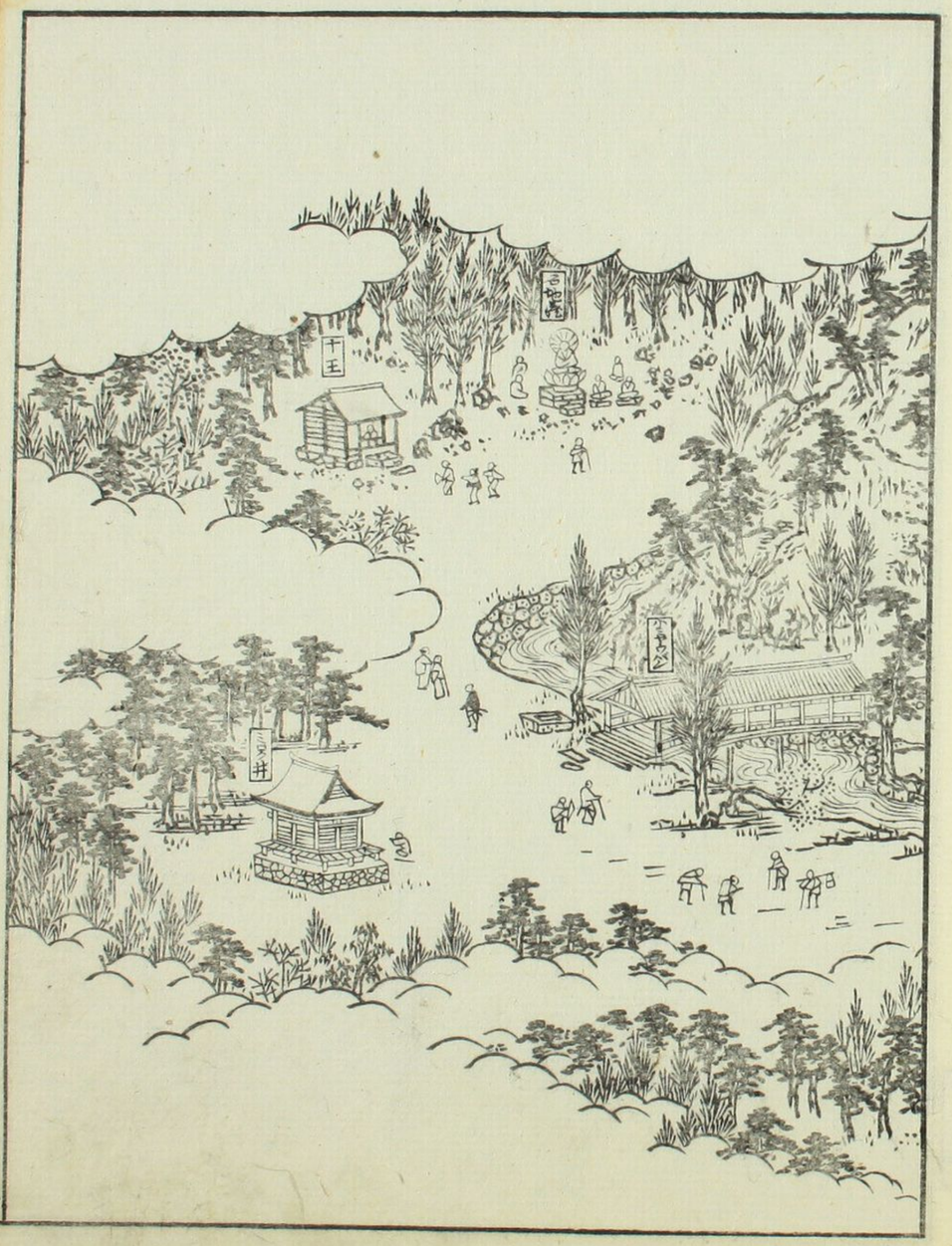
六地藏

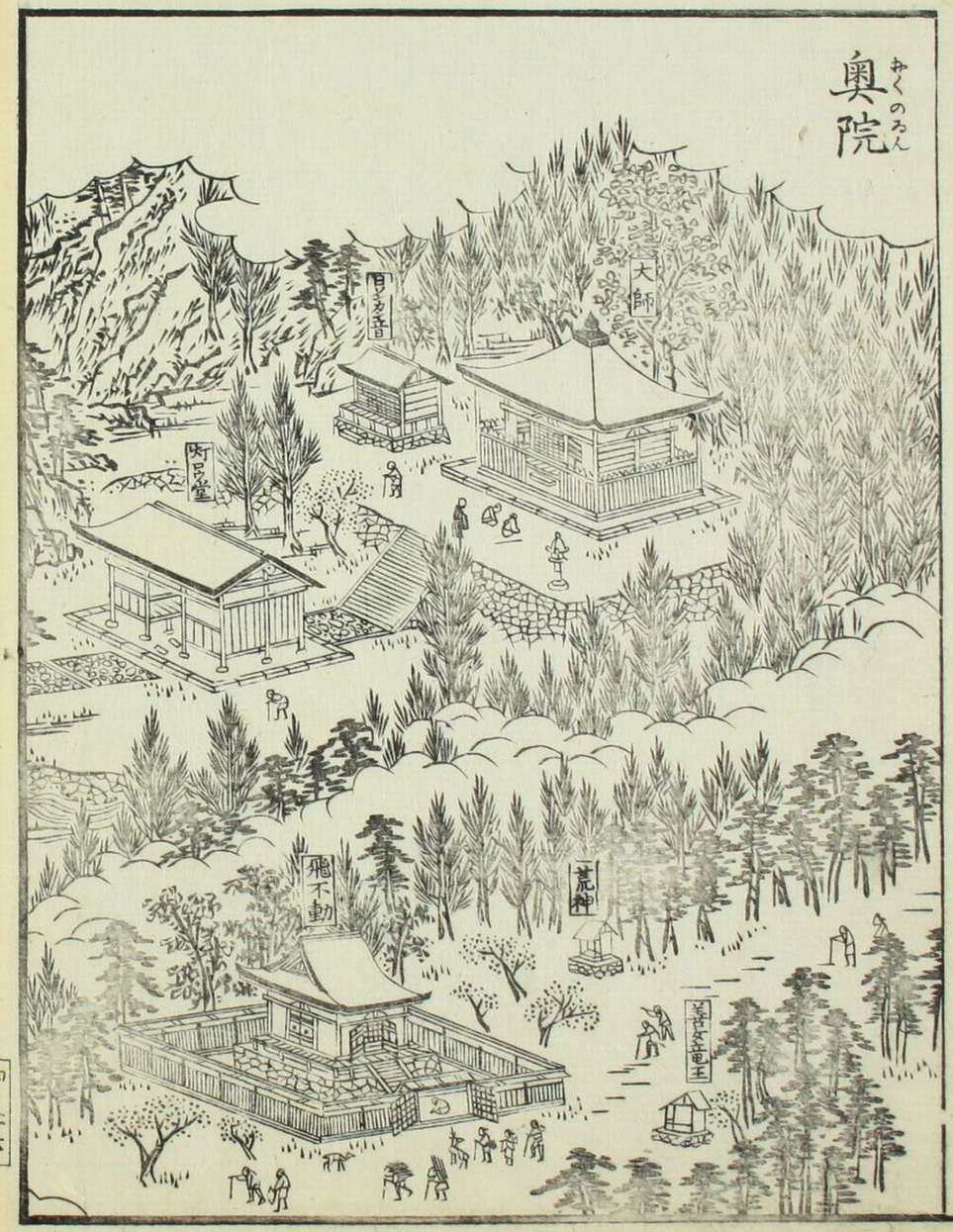
龍燈扶 此所明神遥拜所

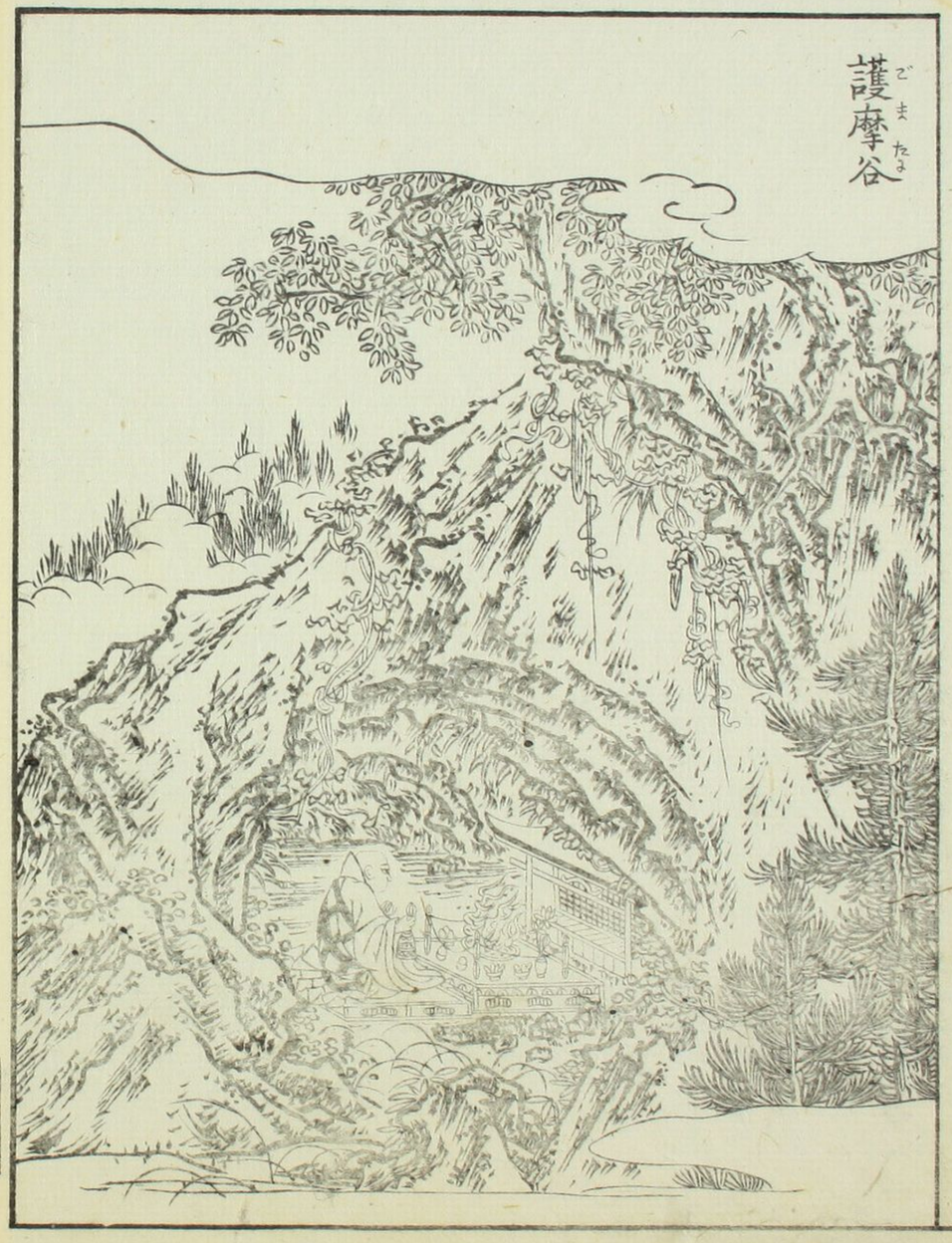
桂幹庶曲して龍の卧せるごとく實ゝ數百歳の樹なりこの所ゝより海上ゝうかぶ龍燈を拜するゝ故ゝ名と次龍燈ハ正月元日よ

り三日まで六日風静ゝ波穏ゝなると紀大宮の沖ゝに現ず年ゝよりその名ゝかう最初一燈くゝかゞ出るとゝ人ゝ須臾してまた傍ゝよりいづ其の數六七燈ゝより三十五十ゝ至り後混じて一燈となる火色常の燈ゝ異なゝ次曉ゝなるゝ消滅ず正月六日の夜ハ腰細浦ゝ迄ゝ出づ毎年この夜府下并ゝ遠境のもの此の山ゝ攀躋り毘沙堂ゝ參籠して臨觀ずゝ弥山ハ未時より後詣ずるゝ紀禁ぜられ山靈を怒れてなり然るゝ今夜ゝかぎりて男女老幼の別なく群集せるゝども怪異のかゝるを例なるゝ中名まあやしむ者なし一年ゝよりて風波のかゝ紀ときハ火光動揺して見定ゝがたし扨ゝ當山奇靈の多かるゝ中ゝもこの龍燈ハ都鄙無人の見ゝとゝ稀なゝ疑ゝまゝかゝ次

頂上石 高さ三丈圍ハ丈ばかり弥山の絶頂なり


十王
三世佛
小堂
三ツ井


奥院
大師
月ノ方音
阿弥堂
飛不動
荒神
地蔵菩薩



十一面観音 日吉ノ社

白山大権現 日吉の下まもあり 下宮ノ

聖天堂

岩屋不動 本堂のかたわらにあり窟 中ハ本尊を安置せり

毘沙門堂 日吉ノ社ノ方 本尊毘沙門天 慶長五丈余腹内ハ鮒の毘沙門を安置せり。正月元日より七日まで供僧乃俗正令を行ふ

鐘撞堂 洪鐘を懸たり右大将平宗盛公の寄附

文珠堂 鐘楼より下まなり 下ノ

大威徳明王堂

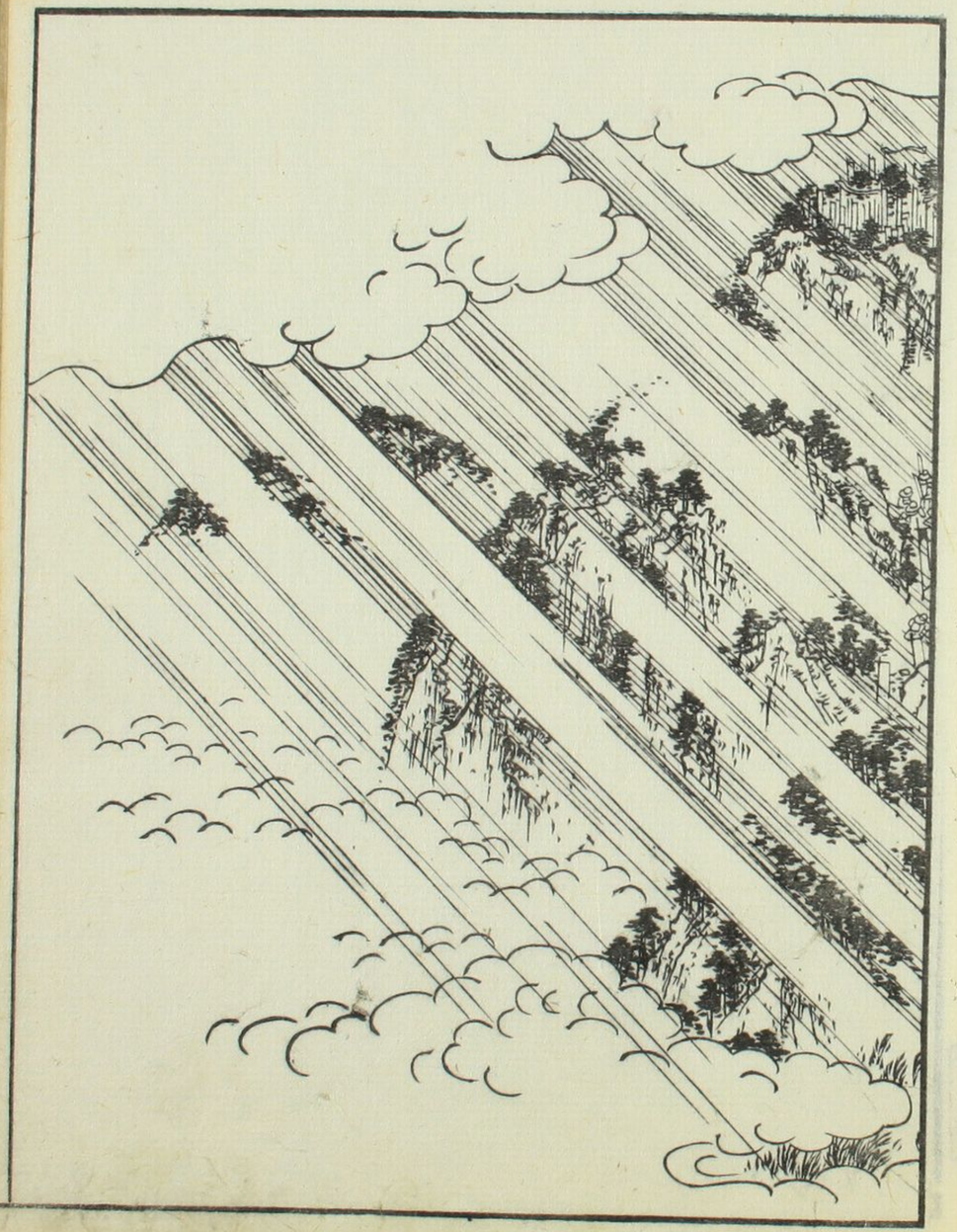
虚空蔵堂

伊勢遥拝所

行者葉師堂 本尊葉師如来 弘法大師の作 東南持村 着のる護佛と次

熊野権現社

龍馬場
合戦



荒神社

来聞持堂 桁三十五間 梁十五間

本尊虚空蔵 弘法大師作

脇士千手観音十一面観音 両尊ともに作詳

この堂は弘法大師来聞持修法満坐の霊場にして閼持の火今はたえず仏来迄持の石壇廿四座ありて修法の行者一日も欠ることなし長享元年は再興あり慶長年中福島正則また修営せり

錫杖梅 来聞持堂の前にあり

弘法大師たゝ来て登山のとき携へたまふる錫杖を建置たまひしが生つきたりとて今その法香尋常のものなり次今は至てむりの春をそえ決まず

瓶華柏 日本にあり

大師佛前の瓶華とせる柏の枝を地にさし置たまひしに義程もなく枝葉生出て大樹となりぬ總て此山は於て来聞持修法の行者この枝を瓶にさしその生枯を以て満坐の成不成を兆次ることあり

勤行は七十五日を以て一座と次

時雨桜 堂前にあり

花重く露稠くして山風に亀へ疎雨の次るが如し因てこの名あり

閼伽井 堂後の岩下にあり大師修法の時乃加持の明星水にして今に清冽甘味なり

玉取岩 昔人海上より望みこの山に璞玉あるこを聞て取ん〳〵とこゝに来聞持堂の下なり数十丈の盤石にして石面平らなり今三尺ばかりの孔岩にあり

曼陀羅石

大師石面に梵字を書しに真字にて三世諸佛天照太神宮正八幡三千七百余座の字を鐫りたまへり

三鬼堂 瑞垣二十間 盤石のうへに建つ

祭神三座 追帳鬼神正面 魔羅鬼神左方 時眉鬼神右方

この處松柏生ひ茂り前は数百丈の絶壁海を抱きて人をして股慄せしむまた遠望の景ありて伊豫の山〻黛のごとく釣する蜑の小舟まで〻なる鳥籍の客ゐ浮ぶがごとくなり

奥院大師堂　金剛燈籠堂并ゐ籠取あり南下の路なり○此所の山の巓ゐ帆掛石といふ名石あり形の似たるを以て号けるまさに鏡岩ともいふこゝは遠方より望むと覩ゐ鏡臺ゐ似たれば なり

弥勒堂　同所ゐあり

下同〜

日輪観音堂

水手向地蔵

十王堂

飛不動堂　本尊不動　覚鑁上人の作

傳へいふもとこの不動尊ハ周防の岩国ゐおもむくゐ一年彼方ゐ祝融の崇あり〜と紀當山ゐとび来りたまひぬといふ依て飛不動の汚名を負せたてまつる今も岩国の城を吉川氏より毎年米拾石をよせられまゐらせ〻堂宇の修理あるもこの縁故なりとぞ

善女龍王社　同所ゐあり

荒神社　同所ゐあり

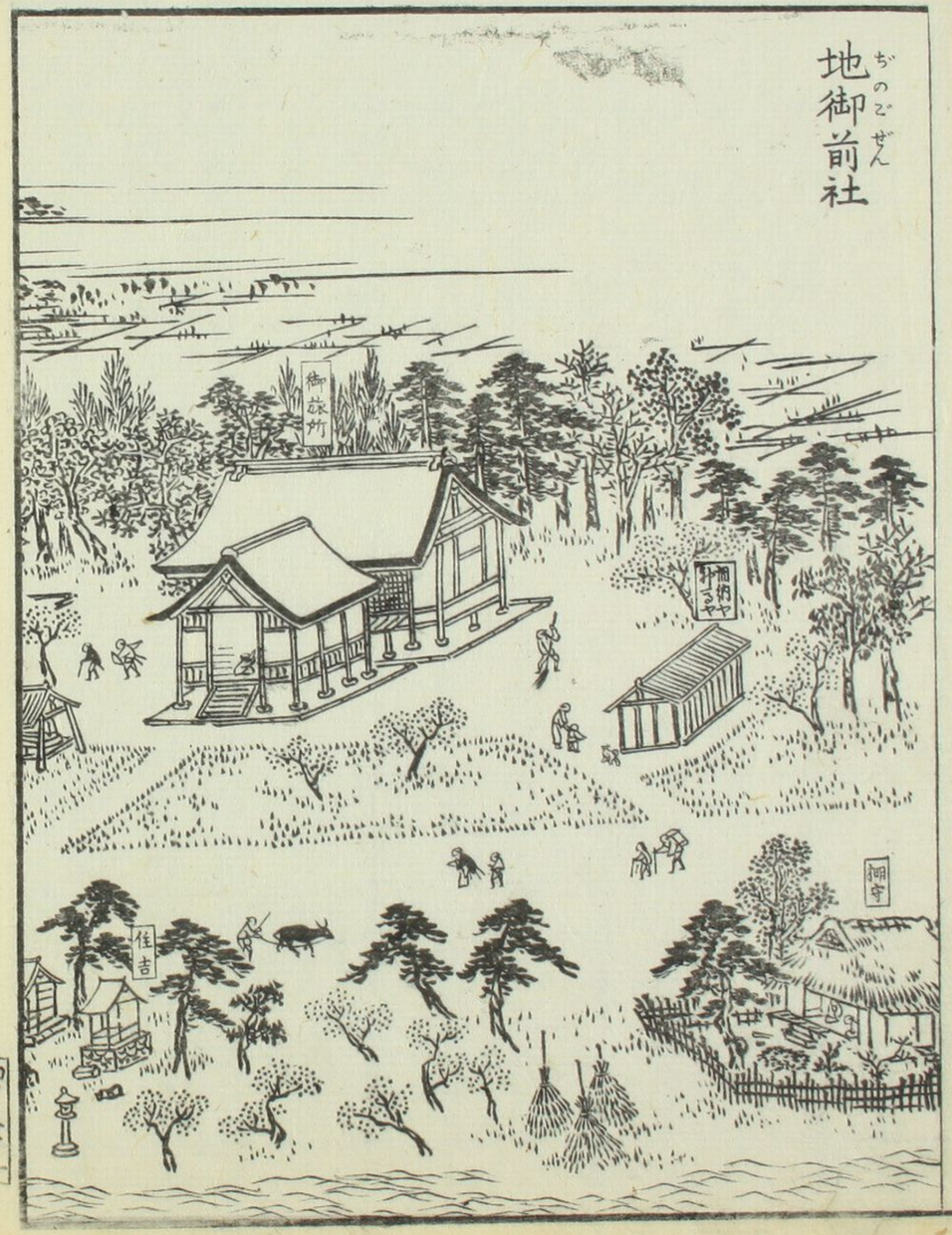
龍馬場　巌上ゐ馬蹄の跡あるを以て一ゐ駒が林と もいふ弘中見弟敗死のところ伝なり

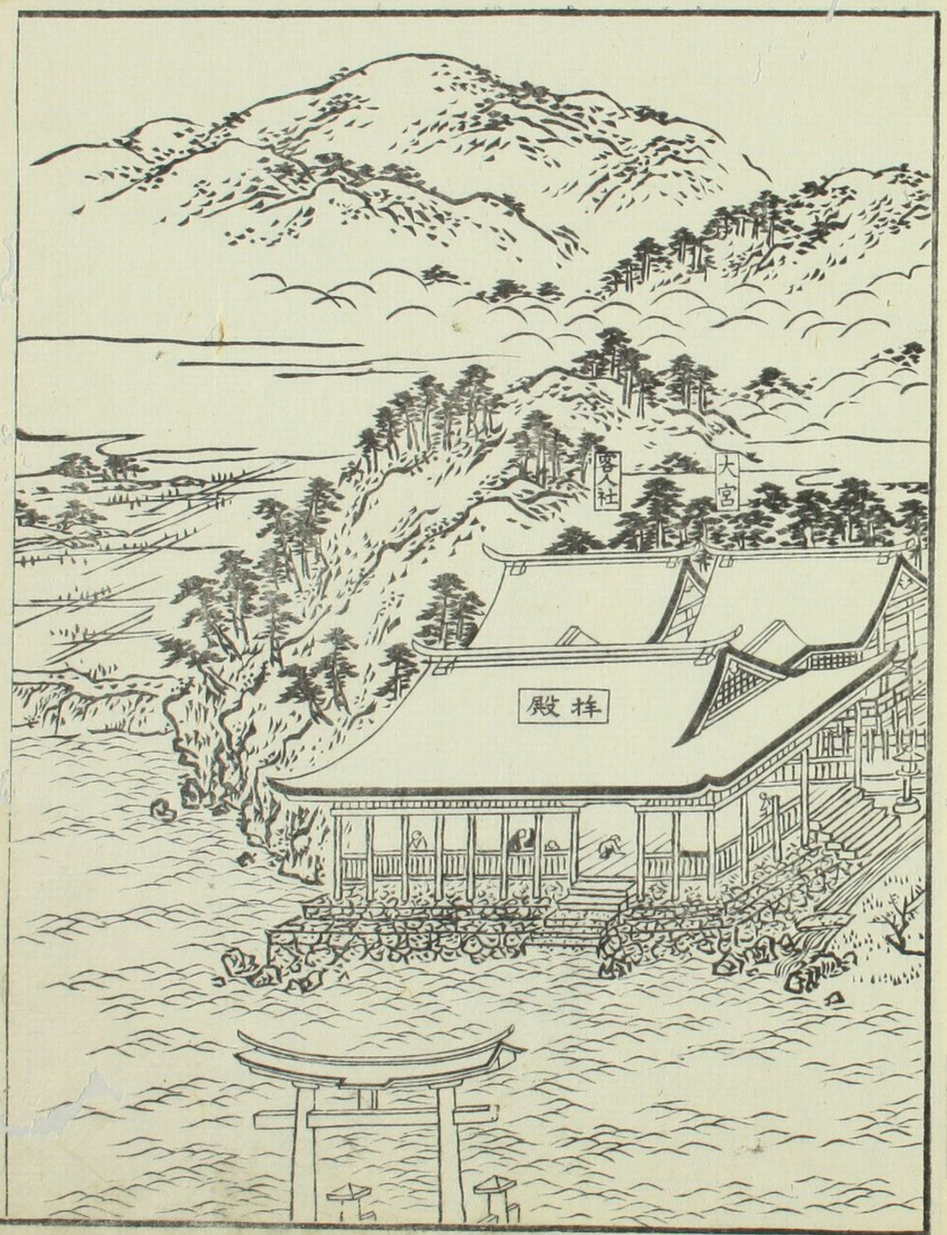
陰徳太平記曰弘中参河守ハ陶入道大元帥ゐて一戦せられなば取て〻〜横合ゐかゝらんと瀧本の観音の傍ゐ暫ひかへてゐの枝をうかゝひ少きども入道紙ゐ〻〻〻せばやみくと落行ゆきば弘中つふ屋きけるハ金姜ハ勇は元就ゐもおとるべき人ゐ非り〜ぞ運ゞ盡れば心まで臆志けるゐ一度も取てゐ〻まくるゐ此なる紀ゐ口惜ゆきと歯噛して弥山ゐ登り奥院ゐて腹切べ〜と三百余人分上りけるゞ次第ゐ落行ゐ程ゐ殘る兵百騎許ゐなりゐ〻かくる所ゐ弥山ゐ来聞持僧行の為ゐ開基の僧の居たりゐる紀足ゐび足〻人なりゐ〻僧ゐる学匠なりゐ〻れば隆包最

後ハ相見して後生一大事をも授りまた無跡の弔をも受ばやと思て
彼僧を呼び召べこの僧隆色を見て備もらる所へいうでらいま次と
いひ召る間合戦の行状一〻語らるる僧の云く今朝暁方より関の声ハ
聞えいつるわどに合戦へいうぐ成行ゆやらんはまども防州方ハ猛勢ハ
それ〳〵ハ一定うち勝たまひたんぬとて存ゆひしハ今かる浦乃格
更ま爰ともわが元ぞ現とも弁ぎゆといひ召まへ隆色かく修羅乃ハ
於て滅を取ハ者へいうなる法を持てう成仏仕るべき即身即仏乃
密旨をも授けたま〳〵と請ふ此僧阿字の一刀を提起して生死をも切
断し涅槃をもまた切て本来空の田地ハ至りた乃と示しハれば隆
色修羅の苦患い殊ま免きがたしとう計玉り姿今浦僧の冥示の旨
趣ハ至りハいでこの苦を遁れハ〳〵僧のいそく修羅の業を以て修
羅の業をうち破したま〳〵畢竟空の田地阿字本不生の所ハ至てハ

修羅の業いうでう受たまふべき修羅の剱戟ハこの〳〵阿字の一刀と変
じハ〳〵といひるを聞得てはてハ浦僧の示ま依て修羅乃此所責を
免るべきすの有様さよとて妻子眷族乃許〳〵最後の告書を徳め
わきそれよう龍が馬場へ〻弥山ま対せる嶺上〳〵攀上う敵よせハて
の節所ま攝て花〻と一軍して戦死をべ〻とぞ待うけるこの世
告知り召れい元親一人も残ら次討取〻と兼て用意せし柵乃木
持集め往廻して一人も洩ら次なと下知せるれ召ハ早雄の若者
共吾も〻と竜ら馬場へ馳上て柵を往んと次る所を弘中百人許
真逆ま突て駆りしらバ諸ま乃考共散〻ハ成て引ま けりかうるる
ハま元春五百騎許まて馳上り往弘中と無ま乃と渡合餘さし洩
ちじと攻戦ひるふ弘中父子たの〻びま郎等弘中四郎左夫日数
白浦十兵衛和木三八幸石弥左などいつる兵ども爰を最後と戦ひ

天トミ社
釈迦堂
金ヒラ


地御前社
御旅所
住吉
明神

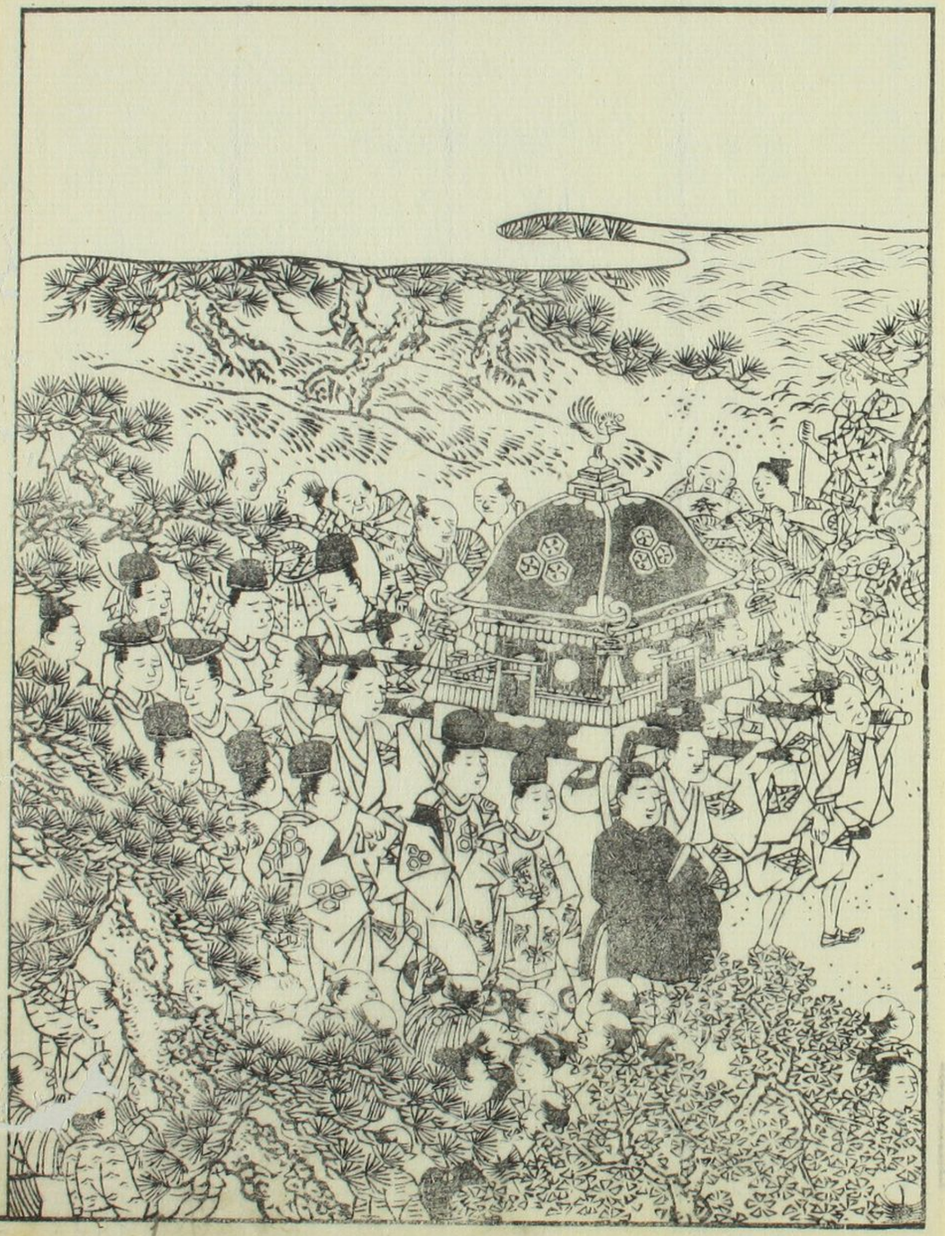

大宮
賓人社
拝殿

其二
胡子社

〻れとも何程数度の合戦に労れる上に今朝暁天より後兵
糧を断る故朧ゆるまう眼くなて終に窠立れ家人も半ばし
けるい人まよからしとや和もひるんまと龍ゝ馬場のけうき巌の
陰へ引退きゝう彼不へハつぶいて攻上るへき板なかりしらい頓て柵の木
一つゝと結廻しる程なたゞ籠中の多網裏に奥ゝ異なる次弘
中ゝ兵と舟いまと三十余人ゝへてのうるゝ始て今一度行くひて
快く付死せんと歯噛して居ゝるにも日二日の朝より勇気も緩
ゝけるやあれ如何なる便も出来て弘中殿父子命助ゝるてまひ
吾ゝも恙なく故国へうるゝもらなと願ひ思ひる処に吉川経茂
両人の者ども訪ゝを兎一方依て一人宛よひとう弘中殿父子降参
一たまへうゝ元就も先年い親しくゝひ隆包父子なれば一命ハた
いてハ助らるへきまてゝゝ弓の弦をたるまゝゝさるハゞ別のといハゞ

て面〻この無中ゝ於てをゝやゝく降参ゝへといひるまゝ誠ゝや思ひ
〻んはた偽なゝんとハれもひながらも一命や助るると空頼ゝし
てやゝうゝんゝを降人ゝ出ゝるけるを其中まて小賢き者を撰ゝ出
しまと龍ゝ馬場へ帰しつゝへ隆包父子の侍ハ大聖院の僧都
良西昨日今日ゝけゝ元就へ歎き申ゝるゝ依て元就も舊識ゝ次
れゝく移れゝ故伝一命助らるへしとの侍ゝまゝ早く降人ゝ出たま
へといをせゝうゝれゝ弘中聞てからくゝと笑ひ元就ゝ一味せんと思ゝ
ばゝの為ゝいまと浅ゝくんゝまゝ多き兎も角も計ゝるゝ入乃為
為へゝうゝれへよゝう戦ハかく成へく思ひ設ゝ故陶殿へも再三意
見を加へつるなりたゝ諫ゝ元就の助へく宣ふとも吾何ぞ檻中の虎
の尾を揺して憐をゝゝ行迹をへな次へゝんや入道ゝ我死せゝる
と毎なは山口ゝい板十郎内蓀弾正陶五郎ゝ紀の大勇の士ゝのゝ

地御前
五月五日祭



其二

其三

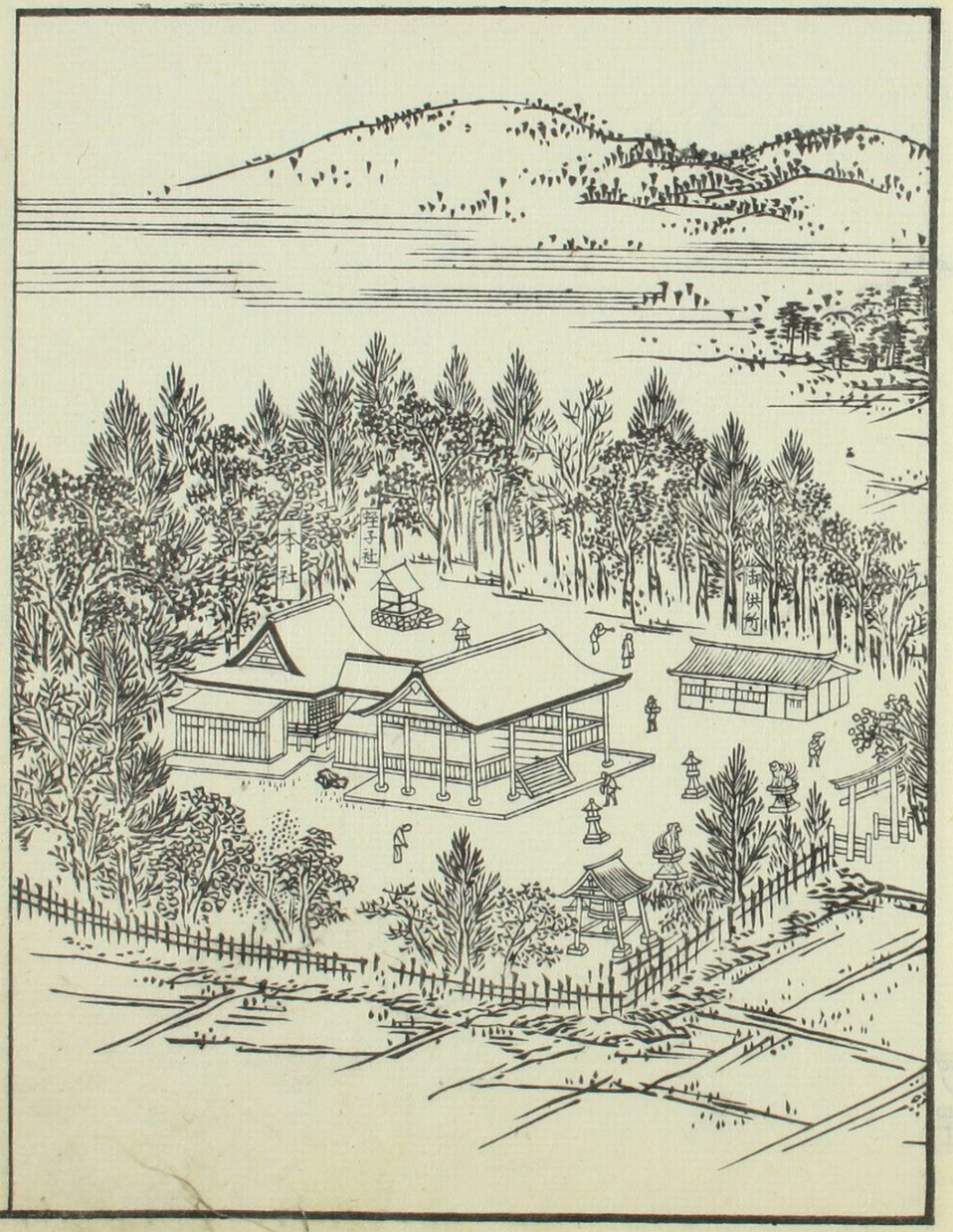
鏑流馬（やぶさめ）

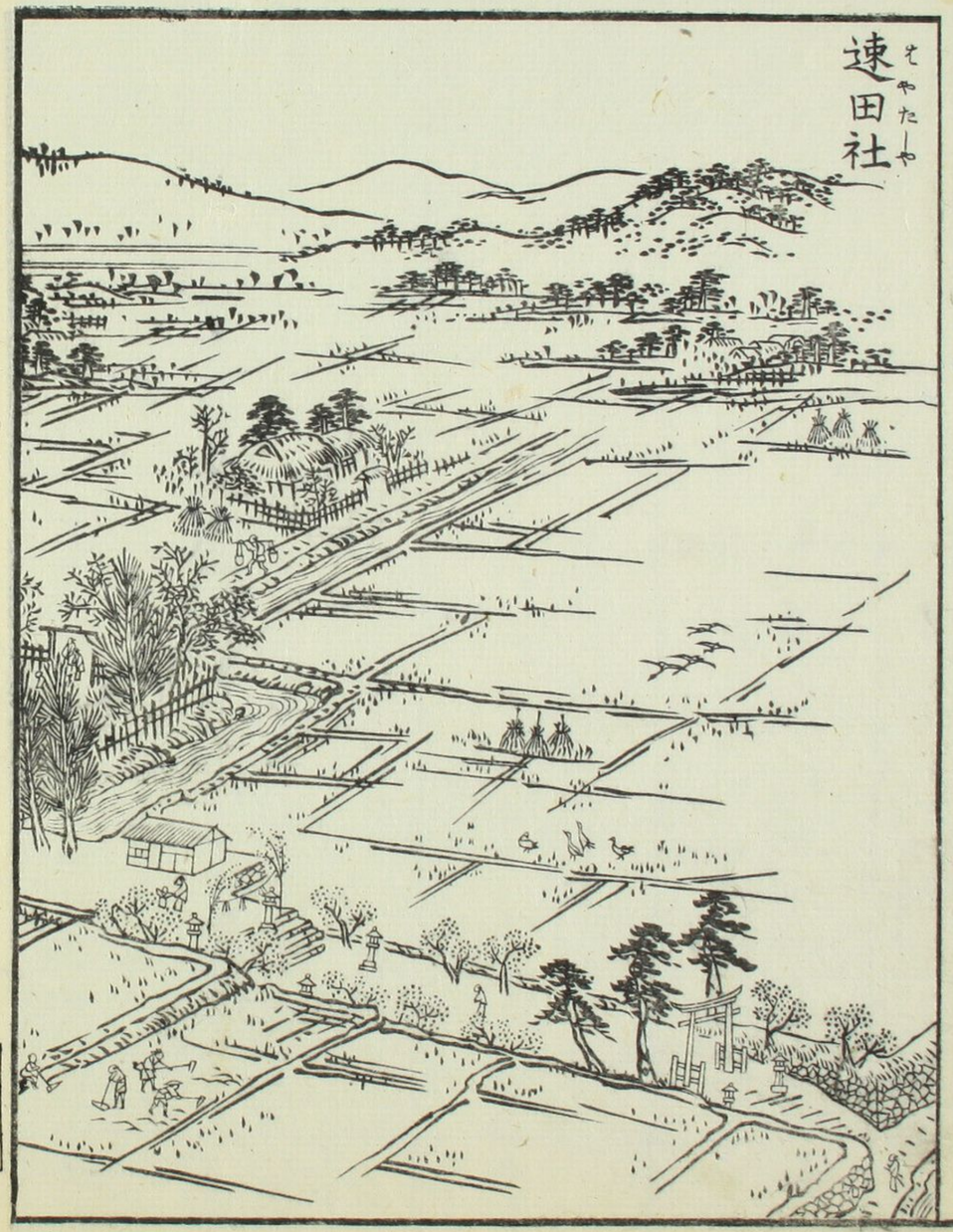
て軍勢も二萬ゐ餘れりそれよりの隆包を助けてゐ（されば虎を千
里の野に放つなるべし大内家に人多くとも隆包をば元就も敵にな
ら虎狼よりも恐ろしと思ふべきを何條助くべきなどい宣ふべき
それゆゑの謀にたるべき隆包にていなきぞ已等ハ命が生たく為
隆糸ゐ出べし高き小ゐ縛られ折頸に成てとハ口惜とハ思ハぎやいひ甲
斐なき者どもなと念りなきべ彼者ども殿の運の極にや敵なくまで助
べしといふなるをえせ推量を先ぐして賢顔に宣ふそけなる孔吾こまづ
降糸して敵の招体をもうかがひまと立帰て諫言を納ぎ申べしとて
ちつれ〳〵降人と成る程ゐひとりぐく偈ひゆき谷隙岩陰にて悉く
頸を刎るる中畧弘中父子味方勢をこれい夜のるゐ或ハ討れ又ハ方
便て生執れなどしるゐどに今ハたゞ主従三人ゐなりにる彼等ら捨
置たりつる弓籠を取て寄手を散〳〵に射立三日までハらられぞ居る

けるが嫡子中勢いで最後の軍せんとて郎等一人脇にたて偃月刀うち
振て出たりなり寄手も夜の内より柵の中へ詰り付居たりるる中
勢と見て吾先に討取んと馳寄たり中勢ハ聞ゆる長刀の達者な
れい水車ゐ廻して切てゐりるるが而ハ一騎歩の細路岩の迫を伝ひ
ゐを潜矢て通るゐなれが傍より中くべき拵もなく寄手多勢なり
といへどもたゞ一騎合の猪頁のこゐをみな空しく見物して居さりり
中勢獅子の洞出虎の一足なるに長刀の奥儀をこの時と発い
てを乱して戦るゐどに集一人に切られ寄手ハ頁死人多く
出来さまども中勢ハ潮をさ（頁ざりうりける而に吉川勢ゐ
小阪越中守るかの後ろにおたりるが先へ行べきなハ岩を伝
ひりて若やと遠矢に射たりしゐ中勢が弓手の肩さ射ぬ立たりに
立たりるはしもの中勢も痛手なれがふくと漂ひて倒まんと決る

而を父の参河守屹と足〳〵其程の浅まに弱るやうやゝ云ひなさ
者の行迹ゝなと眼をいゝ〳〵〳〵いひ出はい中勢莞爾と笑ひ今ハ是
までよてい沙先〳〵まゐりれ〳〵と直下三ゝ丈ゞかりなる龍ゞ馬場の洞口ハ
臨て已ハ飛ぬんと沙る而を然谷伊豆守ゞ郎等朱田新左衛門直久思ひ
切て一と声ゝ踏り越り無ゝと組ぶり中勢彼と共ハ洞口〳〵落入と〳〵る君
朱田引受て吾まづ倒さ味方の陣のゝ〳〵おちて上ハなり下まゝり暫〳〵ハ
組合と足えーゞ中勢ハ名を得一大力なりといへども今日三日兵糧を
絶るのゝち水をゝ〳〵飲ぎ〳〵て疲ゞの戦ハ力つゝぬ且深ゝ負ゝり
ゝ迄バ了ハ朱田ハ討ゝるり異を足て三河守まゝて中勢追付ゞき
ぞゝて鎧の上帯切て次て腹を切んと沙る而を阿部治兵衛廣
秀ゞ郎等井上孫右衛門一太力切たり〳〵迄バ隆色援役ける
左力ゝて戦ゝ迄ど毎初太力をお付られ後ハそゝて討ゝるり同郎等

も主と同道ハなゝんと切てゝるりけるを吉川勢井尻又右衛門討てゝるかく
所〳〵ゝて討取〳〵頸ども提〳〵来りける程ハ總計ハ七百八十五級なり
生捕まゝ負を〳〵次藤州勢ハ都合三ゝ五百人なれど誰一人として分捕
せぬるハなかりゝ後ハ名ある武士をこ捨殺さゝ迄〳〵の下部
共をバ一命を助〳〵る初度の合戦ハ打負て其まゝ舟ハ取乗ゝ
たる者一万ハ五千人もやゝ〳〵ん残黨まゝ夜ハ紛ゝ筏を組て向地
へ去るもゝりまゝ大野辺〳〵游〳〵て助〳〵りける者もゝり山中ハ
隠れ菓を食て五六十日を経て後蛮の釣舟ハ便を得て故郷〳〵へ
る者も多かりゝ爰ハ不思議なりつるい塔の園より社壇の前後
専ら初度の合戦場ゝ而ハ互ハ名乗ゝけ〳〵命も惜まず戦ひ〳〵ハ
ひとりも死人ハなかりゝ是偏一なかり明神社頭を汚さるまゝき
沙方仮なるべ〳〵と諸人奇異の思をなす次下畧○この役篇の内ハ於て戦死せし者多かるを弘仲父ゝゝかく始


本社
祥子社
御供所


速田社（すやたーや）

未を詳悉せーとい渠迂徒ふ與して名を石載の下ふ汚せうとい（ともその
勇烈拔群人をして喻映せーむ故ふ弁て奉まると紙ハ波

三剣窟　龍が石場ふ至る路ふあり

傳へいふ巻一ふ載るとて絃三段ふ折れ〜御剣を納めうと

繪馬岩　門上の上数十丈の巖壁なり中央ふ馬の形を畫ごと〜きく望めハ赤色ふして其色昔より曾て変せ波りなかや

龍窟　一ふ護摩谷の窟とふ盤石上より覆ひうて一ふ室屋の〜ど〜内ふ弘法大師の像を安なう

この所ハ弘法大師護摩修法のあとなうといふ傍ふ鈴ら洞とていまし〜へ

龍の出〜といふ穴あり其深さ知ら波ず〜て山辺を龍が馬場といふも

名の起りハそなるべ〜

朝日観音堂

夕日観音堂　この處より神馬座町地

○以上島内の神祠佛観勝區旧跡等なり

地御前社　嚴島を去ること三十六町佐伯郡地方ふあり
地御前村といふ

本社正殿六座　客人宮五座　祭神共ふ嚴島ふ同〜○一説ふこの社ハ天照大神等ふ吾勝尊を祭るとられどさせる徴なし

幣殿　奉社客人宮各二所あり　○拜殿　門上　○鳥居　拜殿を去ること百間余海中ふ建り高さ三丈　○手供屋　○廳屋

○楽屋　○鐘楼　古鐘ハ天文年間大内義隆の寄附　○讀経所　○手旅所　拜殿ふ居なり　○

恵美須社　○釈迦堂　○観音堂　○毘沙門堂

當社の創立年月詳なら波ども伝ふハ〜り　一説ふハ承久の頃佐伯郡廿日市櫻尾城主義秀
実ハ嚴島の奉祀を兼なり〜ふ風波のとき渡海

て清盛重脩あり〜と伝ふハ〜り

なるまろが故ふ社を建て祭祀を行ひ〜ともいふ

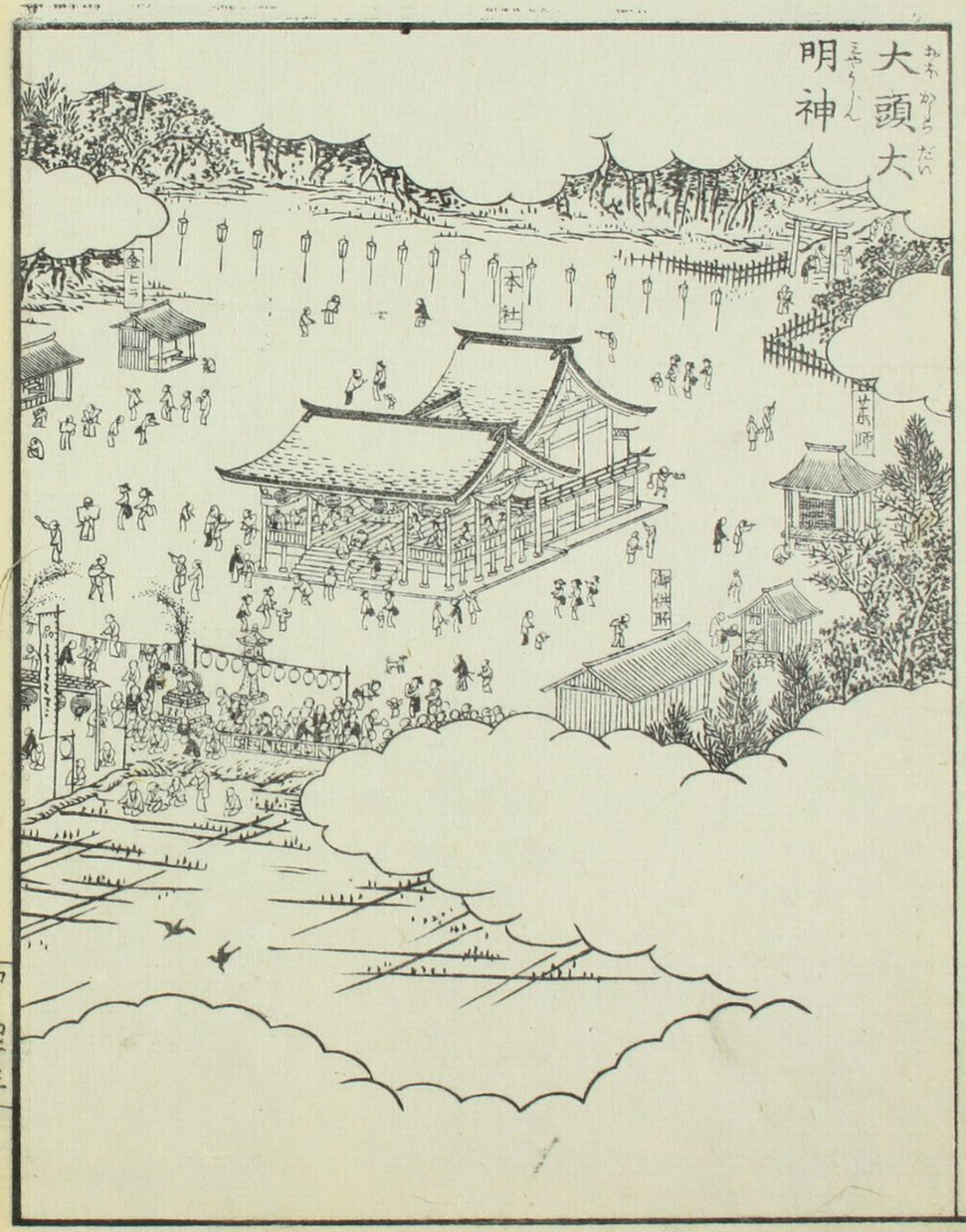
嚴島神廟と日時の鎮坐ふ

方ふ坐が故ふ地手前と呼奉り年中の行事粗左の如〜

正月元日　嚴島より諸祠官渡海して祭事をとむ当社の棚守手供を奉り神楽東遊永子の曲を奏ス

同二日　寅の上刻諸祠官手供を奉る其余七日まで七種を奉る式ハなし〜　○二月朔日　手供を奉る以下毎月ハなし　○五月三日　嚴島の祠官渡海して手供を奉り祝詞上ゲ榊舞を奏ス又人長の舞東遊等ハ以日神輿手旅所（出手行列ハ警蹕仕人三種神器獅子神馬楽人社司諸職司権禰宜内侍神輿三座著手の後手供を奉り舞乗陵王納蘇利を奏ス

大社
ギヲン天神
神主


大頭大明神
金ヒラ
本社
社家

同四日 寅上刻ゟ旅所ゟ奏樂獅子舞 同五日 寅刻樂ゟ午の刻ゟ洗米を供ぜ未刻ゟ旅所ゟ還御儀式三日ゟ同し 還御の後鋼流馬あり
の中刻ゟ供を奉り舞乐を
奏次三日のごとし
○六月十七夜 嚴島の神松この社ゟ来るもの 同晦日大祓 鳥居の正面
奥ゟ詳らなり
ゟて夏越の
後をなし次
○九月三日 神乐ゟ旅所へ渡ゟあり 樂後五月ゟ同し 廿日ゟ七日
佐伯郡平良ゟ鎮坐○幣殿拝殿
平門ゟ供ゟ鐘楼ゟあり
速田大明神社
祭神霊鳥
社傳ゟ云く上古三神伊都岐島ゟ臨幸まし〳〵ける時霊鳥部曲ゟ侍り
けるゟ鎮坐の後この平良の郷ゟとび去り地土人岩木葉とふれ
きなこれを一社ゟ勅請せうとゟ宝殿ゟ日本紀ゟ 神武天
皇大和国の逆徒を退治しなまつりし時八咫烏先導のことあり是
ハこの社ゟ祭る所の霊鳥も三神を嚴島ゟ先導なてまつりしなるべ
しかくて考れば速田ハ八咫の訛ぜるゟや 古文書ゟい速谷とあ
り故ゟまたこの説ゟハ旧ゟ記ゟ阿岐國造飽速玉命とゟつて速玉速
谷言左近しもくハこの國造を祭りしなんといれと社傳ゟいふと
ろ上件の如くなれもその是非今ハ未かたし
○延喜神名式曰安芸國佐伯郡速谷神社名神大月次新嘗
○三代實録曰貞観元年春正月九七日甲申安芸國従五位上速
谷神社叙従四位上
○類聚國史 月次祭之部 曰弘仁二年七月安芸國佐伯郡速谷神伊都
岐島神並預名神例幣
○延喜臨時祭式曰安芸國三座速谷嚴島多家
例祭十一月中の申日
恵美須社 瑞籬の内 ○岩木権現社 社ゟ二町ゟ神のゟ林中ゟあり 平良の地 ○
鐘楼 文明年中の鐘を懸く
大頭大明神社 外宮を去ること三十町佐伯郡大野村ゟ鎮座幣殿拝殿ゟ居あり

祭神二座　大山祇命　佐伯鞍職一説岡常立尊を加へて三座と次

古事記日記を按ずるに伊弉諾尊斬軻遇突為五段一則首化為大山祇二則身中化為中山祇三則手化為麓山祇四則腰化為正勝山祇五則足化為雛山祇とあり又三則腹化為奥山祇とも云へり今この社の末社中山塩屋奥谷などいふ所に小祠ありて里人これを当社分身の神といひ按ずるに当社首為大山祇といふより大首と称ぜしなるべし　中山奥谷中山祇奥山祇なる塩屋八雛山祇の転訛ともいふべし　こハ堅固の愚案なれば信ぜ来てかゝりといふまいあり次着官後に於て次べし

例祭九月廿八日　厳島の祠官ことゝく渡海して神供を奉るその式ミな古風を存せり　桃祭永年の楽を奏ず

○毎年の九月廿八日ハ鳥の別といふことあり当社の祠官多居の傍に食を供し神楽を奏ず次ぎ神移一羽とび来り神供をなくるなりそ

もこの神鴉とふ所弥山の条に記せるごとく往古より一羽年〻相續せり三月の末より雌鳥巣を作り雛移一羽を育次故に厳嶋島巡ハ日月のころハ雄鳥ばかりひとりのみ出づ六月の末七月ハ至て子移を率ゐ養父嶋の汚社ハ出て鳥喰上のこと学ばしむ八九月のころハ親子二羽ともに出つ然るにこの廿八日ハ至て親鳥一羽来りて鳥喰をなげ終りて行方しらずその翌日より子移一羽のみ養父崎の多哈に出づいよ〻より一年もたゞことなし且厳島より大野まで一里余の海を隔たるにこの日の巳刻をうなゝ次たゞ次〻して飛来るも霊奇ハあるべや

芝行ふりに曰く長月廿一日地侍前といふところ孫の西ひがしより山路に入るほどに大野の山中といふところにまろう蛇長月の頃ほひ〻〻と孫ありて本の下露まそにもとり

男滝

大野の滝
女滝

次而せくゐ系のいろ濃く見渡されたるほよ去れの系の
嵐よりろくなりきて松のこゑ山河のれとゐ響きいのひらるあけ
ぐらけ永ゐ〜みゝ れぬえろう
とるかくふ〜〜命を れもふ永ゐとち永いろちゐ れふの中山　添臭世
むり〜誰ぐ蔭るもせんとまく椎の れふの中山かく〜げるん
この山をとけ下りてまと浦ゐ出ろうむりひの山い巌島山のみ
なるのきづれたりけり申き免ぐりてなゐおちの〜歩よなり
ふたるろ乳と胡佐西のろとを出る友ふ祢大船どもくいま
ぞ退風よ帆らげも見申免るふ祢なる人もこなるとを申已
と見物を次第る
れふの浦をろとゐ四〜山梨のかこえのもみぢいろに出て
この舟どものゐ朝系のいとなく次ろとて燃のたちのぼりて

波ふうつろ多々〜紀んいろん人ゐ見をまゐ〜
なみの上ゐもしほやくろと見をるゐ何ま社小舟ほたく火をゐ

天王社 佐伯郡宮内村ゐあり　祭神不詳

或ハ千頭天皇を祭るといひまるとハ神武天皇ともいへり 例祭九月十日

大瀧大明神社 佐伯郡大竹村ゐあり　祭神湍津姫命　例祭九月十九日

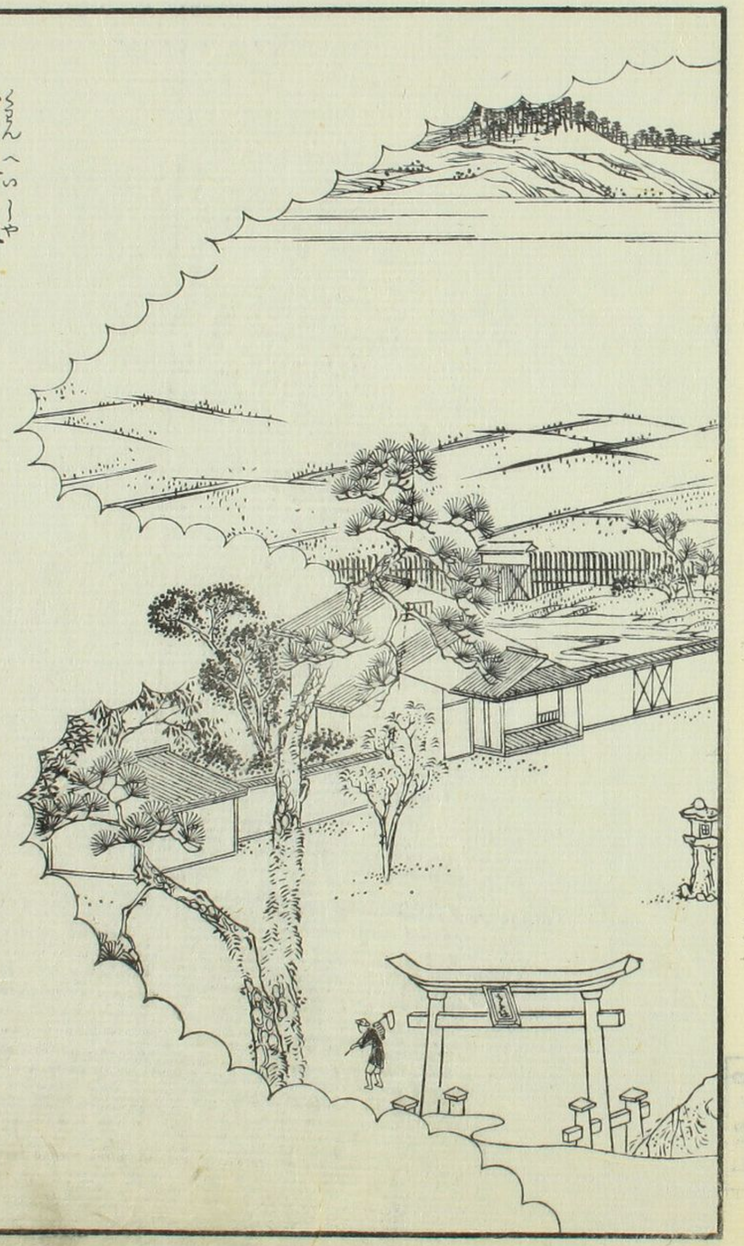
官幣社 沼田郡下安村祇園ゐあり

氏社より毎年社人幣帛玉串をとりのくて嚴島初申の祭りに奉る
これ往古奉幣使のたちる時よりの例式とぞ官幣の名いこれよれ
るなるべ〜まこのゐ社ゐ疱瘡を祈りて神験ゐ〜

惣社 安芸郡府中村ゐあり

角振社 同所ゐ

府中上郷田取氏



官幣社

官幣とハ神祇官より畿内畿外の諸社へ進らゝ幣帛を延喜巳時祭式ゟ祈年祭神大四百九十二座三百四座案上官幣一百八十八座國司所祭

とあるこの案上官幣のことなりこれは預りたまふ神當國ゑを速谷神社たゞ一座の外ハ於さゝまさゞその祭儀ハ日式ゑ平明奠幣物於齋院案上并案下掃部寮設座於内外神祇官人率御巫等入自中門就西廳座東面北上大臣以下入自北門就北廳座御巫就廳下座群官入自南門就南廳座北面東上神部引祝部等入立於西廳之南庭訖而神祇官人降就廳前座中臣進就座宣祝詞毎一段畢祝部称唯宣訖中臣退出大臣以下諸司拍手両段不称唯然後皆還本座伯命云奉班幣帛史称唯忌部二人進夾案立史以次唱御巫及社祝各称唯進忌部頒幣帛畢史還座申頒幣訖諸司退出と見えてこれ毎年二月に日のことなりかくまでも厳なる朝廷の常典なりしゝど世の衰へゆくまゝまいつゝ式内の名神も無きが如くなり果例年の祭ゑも棄りたりゝん既ゑ三善清行の意見封ゑ祈年祭のこと就あげて即以幣帛絹掛著懐中拔棄拵取其鉾頃其瓮酒一擧飲盡曾無一人全持出神祇官之門者といへり當時もゝ志りまゝていたんや保元平治の乱後ちや式文の行はざりゝんこと於もひやるへ

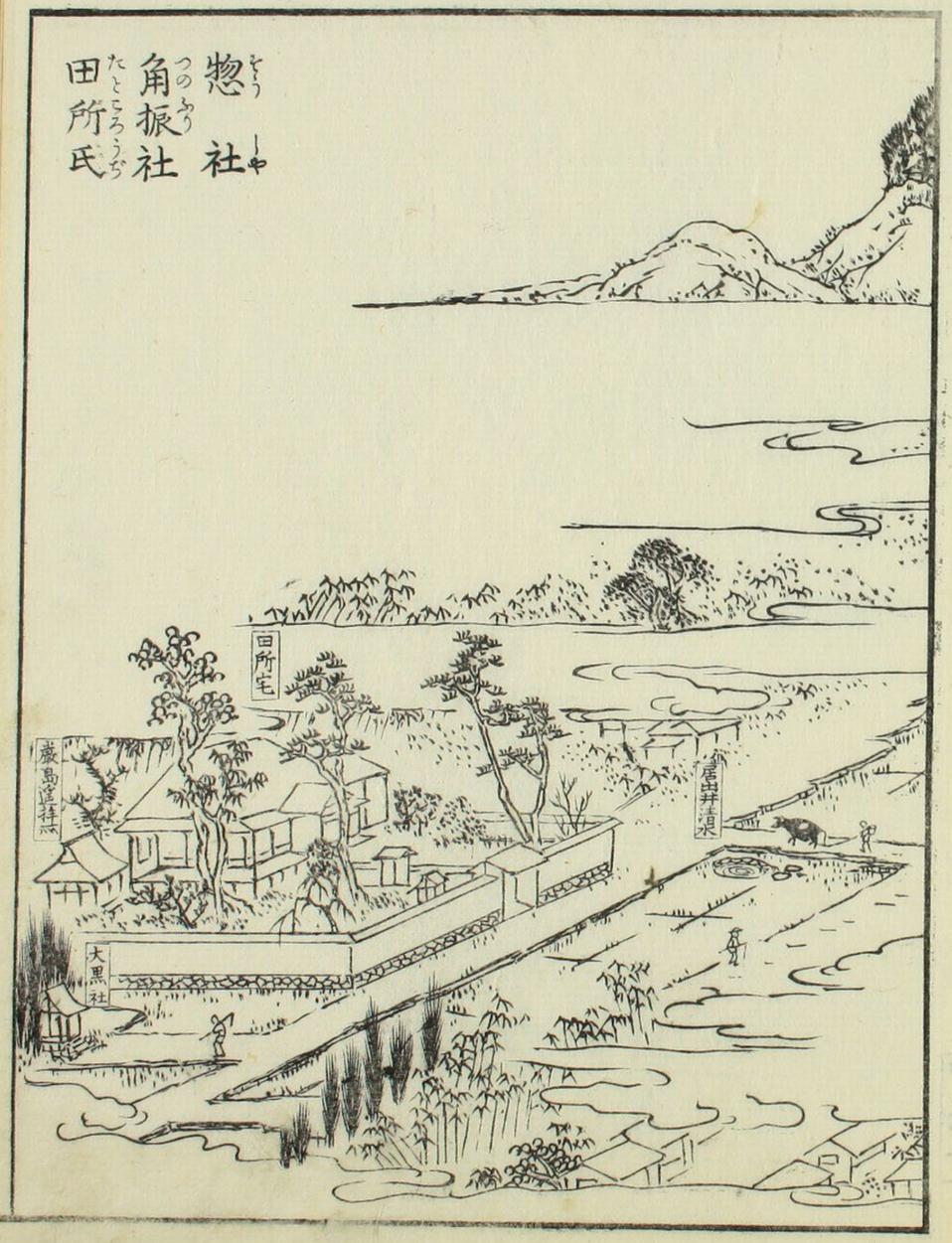
かゝれ共速谷の官幣も断絶いふもさゝなり然るゑ平清盛公この厳島の冥助ゑよりて一品の尊位ゑのぼり桐園の極官ゑ至りたまひゝなばふく信仰の思ひをそゝぐて後ゑ朝廷ゑ奏聞當社を官幣の列ゑもゝ免たまへりけりゑゝ山槐記治承三年二月廿九日の件ゑ詳ゝゑ記ゝたまひて巻五ゑ載をゝりその後源頼朝公天下の権をとりたまひゝより爭朝廷いよゝゝ衰へさまひて官幣の式もあゝばなりつゝ免ども國府ゑいさゝゑる回きを失ゝゞ田祢職をつとむる人かのごと如の礼を行ひゝとゑもつるその證ハ田耶氏と官幣社の祠官と初申の祭ゑ奉仕をる趣ゑて志るべゝ然いあれども今の祭儀ハたゞ告朔の餼羊ゑゝ古へを観るゑ足ることゑいあゝばされば官幣社ハ後世のやしろゑて田祢氏田勢のこと志ゞきゆゑ於のつゞ纖氣の混せんことを於されて淨地ゑ幣を於く屋代を構へたりゝるゞいつゝ社ゝなれるゑて延喜式の官幣ゑ拘留祈ゑいあゝゝるべゝ

府中村に住て嚴島社二月十一月初申祭奉幣のこと掌れり祖先は佐伯某　推古天皇の御宇より此處に住るよしなれども遠たる上世のこと故に典籍の徴と次べきなし延喜年中に佐伯資隆といふ者ありそれより今に至て三十六代血脈相續をといへり然れども家乘記錄に文永二年二月十五日の祝融の災に燒失せしかば詳らかなる次たぐ餘燼の逸書によりてそれ大概を記すのみ久壽二年に佐伯則兼大番にて上京し元弘三年に後醍醐天皇隱岐の島より伯耆の船上に御遷座のとき佐伯七郎未忠系りしかば頭中將敬忠卿を以て敵感の綸旨をたまへり建久三年九月三日宇治合戰のとき紀今按にこの合戰のこと太平記十七の卷に所見なし細川氏曰く神代巻五郎兼治が狀を以て見るに延元元年八月十三日に義貞京坂の後合戰兩三度に及ぶとあり此歟とも今本文を考るに此日の合戰の事なるべしかゝれどもいまし詳ならず建久三年は即ち延元改元の年にてこの日のこと上伴の如くなれば九月三日の宇治合戰もいま詳ならず是利尊氏公より款狀を下され正平六年に南朝へ軍忠を勵ミ

ふよりて當國河戸村を兵粮料とゝて賜てたまはり其際世く田取職をかねて奉幣の奉幣は更にもいた次公家一方の二番鎮ともなり居たりしかど大内義隆の代に國ゝ内の時五千石余の采地を削られ次で家も絶なんとせしかも利家より奉幣雜費料とゝて五百石たまはりしかまた福島氏に削られ漸く今のさまになりき○二月十一月初申祭は十一日以前の戌の日の夜より潔齋しその翌日に御幣をとゝのへ酒宴をなし次これを和をげしといひまた一のよろこともいふその後午の日に神乘を行ひ夜に入て府中より船にのり渡海をその儀潔齋所より拂をたてさせ路次の不淨を拂ひ也故に此日はかまくらを拂を警蹕といふそれより嚴島の有の浦より紀ての棚に家に著岸のよし告ぐ　以下のこと年中行事の部にあり

抓島　嚴島より廣島へ渡海の中途にあり周廻三町

惣社
角振社
田所氏



半圖

湯蓋道空の故事
豐長畫

俗傳ふ云三女神芋抓を投じ玉まひるゞ島となるなりと島上ふ湯
蓋道空の墓河ゝ乃空ハ佐伯郡五日市海老山の樽ふ夫婦沈みて
その身貪しく漁を業とな〳〵けるふ嚴島大明神を信仰〳〵造次
顛沛ふ於てゝ深念〳〵奉り毎日神供の魚を捧け〳〵誠實の志
を感〳〵たまひゝよや或時島の沖ふ蓬萊浮出て空ゞ舟金の
砂の中をゆくら如くなり〳〵紙行やゝく思ひてその砂を船ふ汲入〳〵
より家榮えたのも〳〵紀永とゝなりよける湯蓋を苗字ふなせることハ家
の傍より溫湯湧出せ〳〵ふよりとゞいつの頃より客人宮破壞せ〳〵乃
空一世の金銀を以て修造〳〵奉り〳〵とゞ今乃空夫婦の像五日市
塩屋大明神の社内ふあり

嚴島圖會卷之四
終